渡り鳥

第４号　１９８３

室蘭市医師親交会誌

渡り鳥

第4号　1983

室蘭市医師親交会誌

―目　次―

表紙　加藤　治良
カット　竹内　隆一、吉井　正仁

記念アルバム（台湾旅行）……1

お元気ですか　―旧友通信―

蜜柑と桃と野兎と……一方井　卓四郎……3

書簡三葉……松岡　幸七・長田　廣・大坪　一昌……4

わが青春

三十年前の私の青春……大辻　祐太郎……5

＝グループ紹介＝

女医会の今昔……安立　かほり……12

座談会

中島の紅い灯
いま・むかし

飯島三男
大岩昌生
大谷地公迪
黒光康夫
畠山正照
本庄晋一

……13

あんらく・いす

学校保健—心臓検診のことなど……種田　豊……19
チベット弥次旅行記……米沢　堡……21
音楽馬鹿の記……安斎哲郎……23
二羽の小鳥……高橋陽夫……26
ゴルフ談議—私のパッティング遍歴（Ⅱ）……久安正道……27
かなり古いお話（その三）……小雲　水……30
◇室蘭「サノサ」……小國　親久・竹内　隆一……31
大正っ子物語—進駐軍余波……加藤治良……32

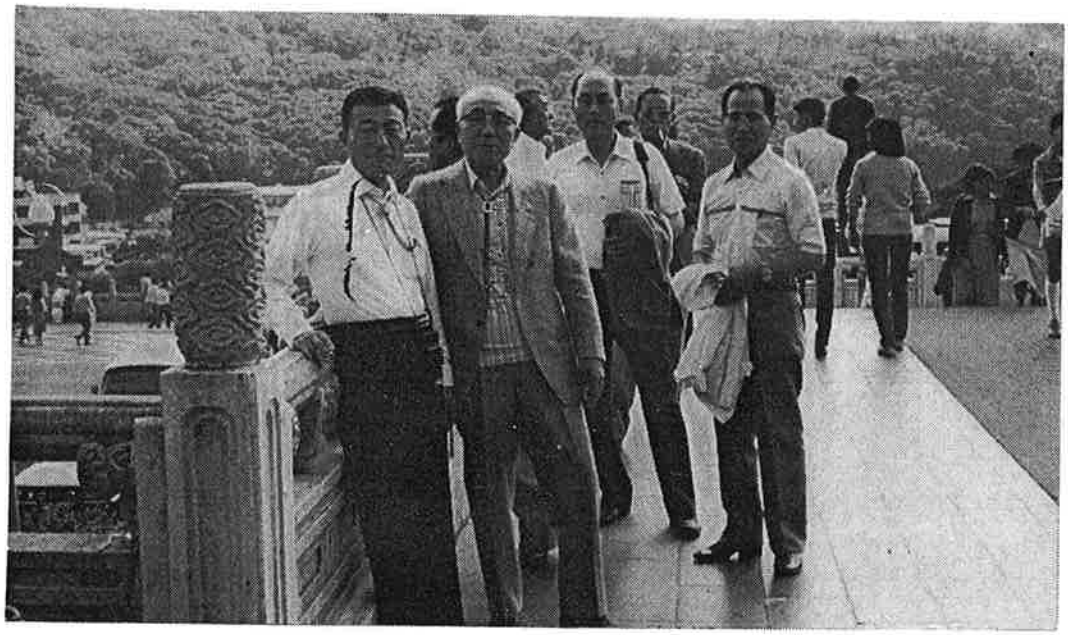
親交会旅行記

□台湾旅行計画の顛末・狩野正直大人・ショッピング……大岩昌生……37
烏来と泰耶魯の踊……国本鎮雄……40
短歌……皆川　英貞・狩野　正直……41
台湾喰べ歩き……高橋昭三……42
余談……大久保洋平……43
□霧のち晴れの洞爺一泊旅行……黒光康夫……44
ゴルフコンペに参加して……野村靖宏……45
会員異動……46
編集後記……47

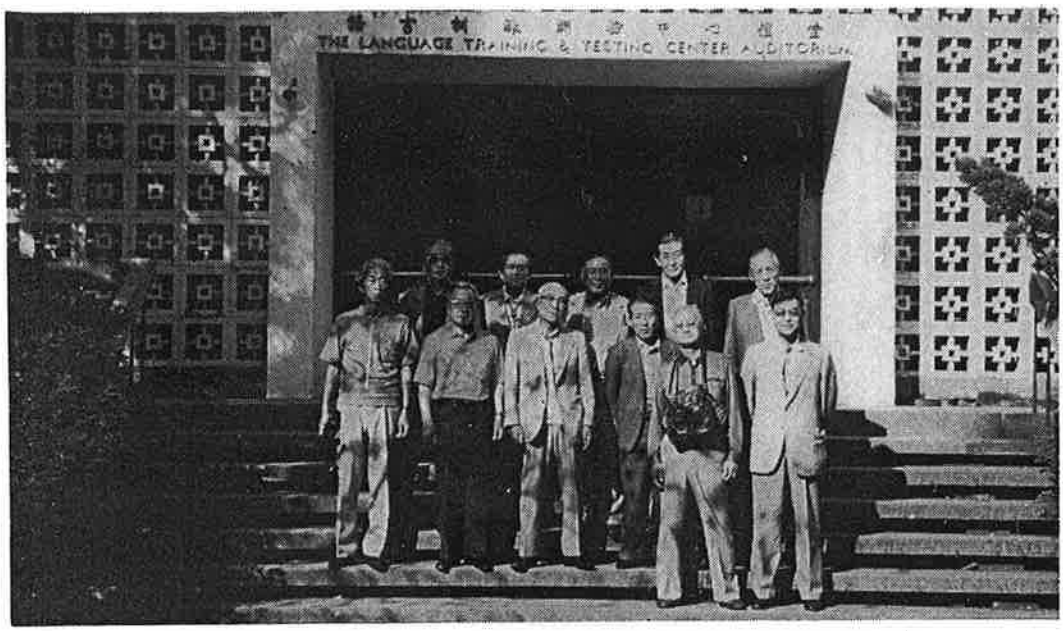
記念アルバム　―台湾旅行―

昭和 57.11.20～11.23

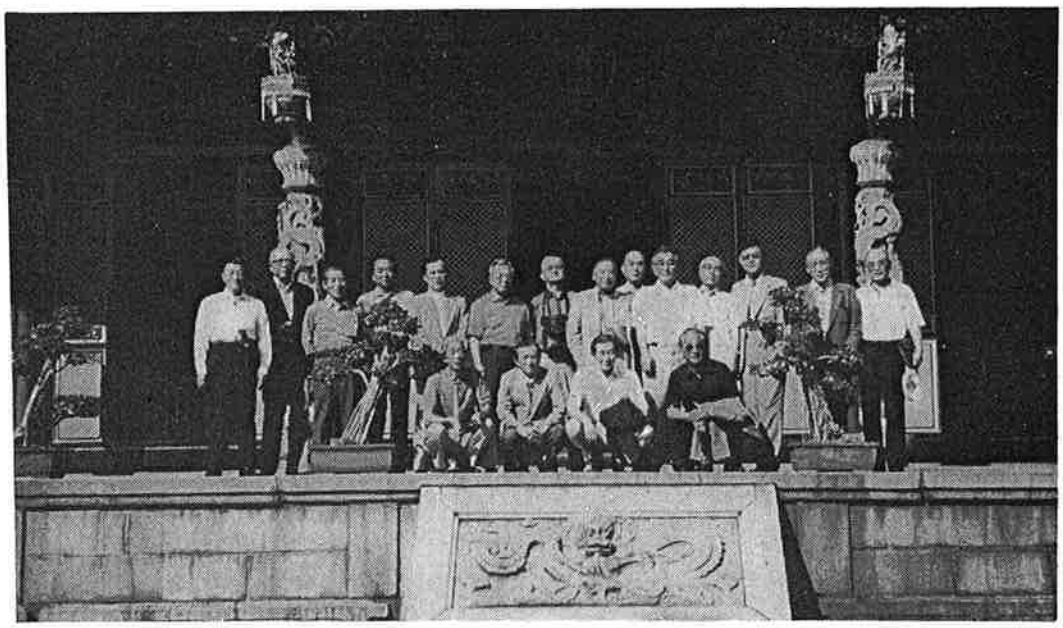
台湾大学医学院正門前にて



故宮博物院前庭にて



医学院言語訓練センター（これらの建物に地下防空壕がある）



台 北 市 孔 子 廟 に て

お元気ですか

旧友通信

蜜柑と桃と野兎と

一方井　卓四郎

このたび加藤治良先生より近況報告のご依頼がありました。先生には色々とお世話にもなり、角力甚句など渋いのどをご披露して下さった楽しい想い出もありますので従わざるを得ません。拙筆ですがお許し願います。

室蘭医師会には市立病院に勤務していた昭和三十一年より十七年間お世話になりました。医師会といいますと開業医が主体ですが、室蘭医師会は勤務医にもたいへん理解が深く、一般の医師会とは一寸ちがうという感じでした。親交会活動も盛んで支笏湖畔に一泊旅行の時、夜中に聞いた仏法僧の鳴声は今でも覚えています。新年宴会の時は、昼の部の碁、将棋、麻雀大会の世話係を例年おおせつかりましたが、今でも盛んなことと思います。

昭和四十八年八月、静岡に移るに際しては東海地震が近く来るということなので、静岡はやめた方がよいのではないか、と忠告して下さった方もありましたが、目下のところ何事もなく、仙台や秋田方面に起きたのは天のすることはわからないものですね。

静岡でのはじめの数年は正月でも雪がなく、一年中露地植えの花のいずれかが咲き何となく季節感がありませんでしたが、慣れますとそれなりに季節があります。一月の初めには蕗のとうが出、下旬には梅が咲きはじめます。ただし鶯の鳴きはじめは三月に入ってで、下旬には近くの山のゼンマイ、ワラビがのび出し、桜も満開になります。四月初め燕が飛び、五月の連休頃になると松林で春蟬が鳴きます。

六月初旬には梅の実を、七月初旬には桃が収穫出来ます。九月下旬は木犀が一斉に咲き、街中がその香につつまれます。十月には蜜柑が色づきはじめます。私の狭い庭にも蜜柑、れもん、桃、梅、柿などあり、それぞれ沢山実をつけます。木の成長はたいへんよく、種から育ったネムの幹はもう直径十糎を超えています。桃は一斉に熟し馬穴に四杯も五杯もとれますので、隣近所に配っても尚残り保存も出来ませんので、せっせと食べますと桃中毒になりそうです。

天気の良い日曜は近くの山に出かけます。徳川家康の最初の墓所、久能山に連なる山（又は丘）ですが、家から五分もかかりません。道のないところを歩きますので、夏も冬もゴム長靴、ジャンパー、麦桿帽子というスタイルでよいリクリェーションになります。蝮草とかオランダキセル等はじめて見る野草も多く地元の人でも知らない人が沢山います。

ラグビーの球ぐらいの雀蜂の巣をみつけ、雨の朝早く長い竹で出入口を塞いで一目散に逃げ、一ヶ月位後で蜂の出入しないのを

たしかめてから巣をそっくり取って来たり、我ながら子供みたいなものです。

三年程前と去年、それぞれ大きい野兎をとりました。皆にどうやってとるんだと聞かれますが、勿論、道具など一切使わず素手です。山でむやみに追いかけても捕るものではありません。もう一匹（羽）捕えたら「素手で兎をとる法」という本を書いて秘伝を公開しようと思っています。幸いに足腰は元気ですので、これからの十年又は二十年は柘植先生に負けないよう、大いに人生を楽しもうと思っております。（昭和58・6）

書簡三葉

松岡幸七先生夫人（58・7・4）

定まらぬ天候がつづく毎日でございます。

先生には御壮健にて活躍の御様子、何よりと存じ上げて居ります。

先頃「波久鳥」にスケッチをとの御依頼頂きながら、ついつい御返事申しおくれ誠に申訳もございません。　主人事ご承知の通り体調をくずしまして以来、絵筆をとれなくなってしまいました。折角御申越し頂きましたのに、おこたえする事が出来ず、誠に申訳ございません。以前の主人なら喜んで早速製作にとりかかりましたのに……残念でなりません。何卒お許し下さいませ。

在蘭中は皆々様の御厚情により楽しい日々をおくりました事、いつも感謝申上げて居ります。昨今は、足が不自由でございますが、幸い痛いところもなく、それなりに元気に孫達にかこまれ、おだやかにすごして居ります。何卒御休心下さいませ。

御期待に添えず、ほんとうに申訳ございません。先づは右御詫びまで。

お暑さに向う折柄、呉々も御自愛のほど念じて居ります。

諸先生方にもよろしく御伝え下さいませ。　かしこ

長田廣先生（58・8・16）

暑中お見舞ありがたう御座いました。

御恙もなく、お過ごしの御様子で何よりの事とお慶び申しあげます。

肌寒い梅雨空から、一転しての猛暑に、寝ぐるしい夜の毎日でしたが、今日は雨に風、今年の夏も峠でしょう。

路傍にはおしろい花（夕化粧）我が家には松虫草が咲いています。室蘭に居りましたら、秋の野草を共に楽しむ事が出来たでしょうに、残念です。

波久鳥の御編集御苦労様です。御健在で。

大坪一昌先生（57・12・7）

八月下旬札幌住宅決定し、在札の次男坊を先ず移しホッとした途端に、愚妻が九月六日、日鋼病院に入院のため自宅の引越しを延期して次男坊と二人でサッチョン生活。九月中は開院準備で札幌、室蘭間を行ったり来たり。十月一日開院後も、毎週土、日は日鋼病院へ往復と、全く息つくヒマもないうち、十月下旬の寒さで持病が悪化して十月二十八日ダウン。輪西で十一月末日まで殆んどベッドイン。十二月三日、約一ケ月後平常に恢復、十二月四日より元気に出勤。

十二月十一日引越し予定。こんどこそどうやら落着いた日日を送れそうです。

わが青春

三十年前の私の青春

大辻　祐太郎

昭和二十八年三月二十三日の夜十時、函館を出発した私の一家は、翌二十四日の真夜中の二時、長万部駅に降り立った。丁度折悪しく吹雪に見舞われ、汚く古びた長万部の田舎駅の待合室で、丸い石炭の投げ込みストーブの周りに集まって暖を取り、始発の午前五時発室蘭行きの鈍行列車を待つ私の心境は、函館に生れ育ち北海道の寒さと侘しさを十分知っていた筈なのに心痛極まりないものであった。一家は私の他に病後の妻と小学校一年生の長女、二才年下の長男、仙台で生まれた許りの一才二ヶ月の次女とこれを背負った女中の六名であった五年振りに遭った吹雪と周囲の侘しい景色は、これから伺う全く未知の室蘭での生活にどの様な運命が待ち受けているかと云う不安で、私達夫婦は唖の様に押し黙り、眠たそうな眼を瞬たたせた子供達も、親の気持を察してか眠たいとも云わず、黙ってストーブの周りに立っていた。

五年間の抗研（東北大学抗酸菌病研究所）に於ける耐乏生活と次女の出産が原因で妻は昭和二十六年四月より六月迄、肋膜炎を起して抗研に入院した等で、親戚からの借金も積り、最早抗研に於ける研究生活が不能になったので、就職を決心し、室蘭市立病院と函館市立病院より赴任を求められたが、当時田舎なる為か八千円も月給が高く且恩師である熊谷岱蔵先生（故人、東北大学総長、抗研創立者、文化勲章受賞者）の、室蘭市は豊かな町だから室蘭へ行ったら宜いだろうとの御勧めに依り、借金を返すのに有利だろうと思っての就職であった

当時私は四十二才、今後の生活と子供達の教育が切実な問題であった私にとって、文字通り必死の覚悟での赴任の旅であった五ケ年間の仙台の生活に馴れた身には、目前の吹雪と裏ぶれた周囲の景色が、いやが上にも私の不安を募らせた。妻が着ていたレインコートは、赴任に際して肩身が狭かろうと新調したものであったが、オーバーコートは高価な為手が届かなかった。

五時発室蘭行きの鈍行は闇夜の中を走っていたが、夜明けと共に室蘭港と対岸の室蘭市街地が見える頃、今迄降りしきっていた吹雪が急に収まり、途端に眩しい程の朝日が射し込み素晴らしい室蘭港と市街地が朝日に輝いて見えて来た。その途端「しめた!!俺の運命も開けるぞ」という霊感と歓喜が全身を漲った。東室蘭に着いてから今度は列車が逆方向に進行するので喫驚、乗り違えたのではないかと慌てて車掌さんに聞いたら、間違いではないと知らされて安心した。

室蘭駅には柘植病院長御夫妻、故塩沢直人内科部長、赴任に関して種々と御世話下さった函中及び大学の先輩である渋田八郎外科部長の諸先生の御出迎いを受け、文字通り地獄で仏に遭った様な安堵に胸を撫で

下した。車で宿舎である小橋内町の林政雄様宅に伺ったが、途中淋しい海岸沿いの末枯れた道を、街の中心地より段々離れて進むので一体どんな処へ行くのかとこれ又不安を募らせた。林様宅は今でも同じであるが港南中学校の裏の高地にあり、この御宅の八丁間二部屋を御借りすることになっていた。御伺いした時には、長女と同じ年頃のお嬢さんを頭に六～七人のお子さん達が日当りの好い縁側で遊んで居られたが、柘植先生の御手紙によれば、小橋内町は閑静な住宅地で、御主人は会社支店長さん、御家族は御夫婦と御子様二人ということであったから、多分附近の子供さんが遊びに来られたんだと思った。林様御夫妻と御面接種々と御話しした処、御子様五人その他は附近の親戚の御子様だと聞いて喫驚した。又林様御夫妻も当方は私等夫婦と子供一人と聞いていたとのことで、子供三人、女中一人がぞろぞろ参上したので、これ又喫驚されたとのことであった。当時の室蘭市の住宅難は想像以上で、私の赴任の為、住宅探しに困却された柘植院長と渋田先生は御苦心の結果、以前より昵懇であった林さんに一杯御馳走し、ウイスキーを一本プレゼントして、世話好きな人柄の林さんを丸め込み、双方の家族数でサバを読み、話を纏めたことを知って、お互いに大笑した。林様御一家の私共に対する御配慮は筆舌に絶したものがあり、土地に不案内な私共に対して、何から彼に迄、御親切に御世話して頂き、二ヶ月後完成した舟見町の六丁、四丁半、台所の室蘭市営アパート第一号に移転する迄の御温情は、誠に骨髄迄浸み亘り生涯忘れ得ぬものがある。

その後私が開業に際しても何くれとなく御世話して頂き、現在に至っても親戚以上の御交際を続けている。

翌二十五日病院に参上したが、当時は本院が昭和二十六年に焼失し、その跡地に建てられたバラックで、昭和二十七年に竣工したコンクリート建の結核病棟（現在の第三病棟）が室蘭市に於ける最高級の建築物で、現在の如く裏山の中腹に厳然と偉容を誇っていた。その三階に肺結核患者が鮨詰めに収容されていたが、入口の床にはクレゾールを浸した布があり、その上に立った途端に結核病棟専用のマスクと白衣を着せられると云う厳重な消毒振りであった。

四月初め三月分の月給として約一万五千円入りの袋を頂いた。柘植病院長の御厚意に依って、仙台を離れた二十三日より三十一日迄の計算であったが、家に帰って早速妻に手渡した処、内容を見た妻は「こんなに沢山貰ったんですか、一ヶ月経ったらどんなに沢山貰うんですか」と仰天して歓声をあげた。一ヶ月二度払いで一万四千円、税金その他を引かれて一万二千円程度、毎日曜日、近郷の角田町に出張して一万円の収入で三ヶ年過した妻にとって全く破天荒な金額であった。

入院患者及び週二回の外来診療で肺結核患者が予想以上に多数なのに驚いたが、住所を見ると輪西町が圧倒的に多かったので輪西と云う街は肺結核患者の巣ではないかと疑った。当時の室蘭市の住民は日照の悪いハーモニカ住宅が多く、富士鉄の工場よりは真赤な煙がモーモーと立ち登り、輪西町から中島町方面に棚引いていた。然も太陽に照らされるとキラキラ光る小さい鉄屑が混っており、この為トタン屋根は二～三年で腐蝕して赤錆が出て張り更えねばならぬと云われ、こんな生活条件では肺結核患者の多発も当然だと思った。

慢性肋膜炎、腸結核、喉頭結核等は「ストマイ」「パス」「ヒドラジット」の御蔭で最早仙台では診られなかったが、室蘭ではウヨウヨ診られ、まだまだ結核疾患の最盛期の状態だと思った。当時室蘭では「ストマイ」「パス」の二者併用のみが行われており、「ヒドラ」の効果は浸透して居なかった。私が赴任して直ちに「ヒドラ」を加えた三者併用療法を行った処、効果は漸

次現われて来た。

十八才の日雇労務者の娘さんが腸結核と腹膜炎で入院していたが、腹部の猛烈な疝痛の為、三者併用とパピアト等の鎮痛剤を打って経過を観察していたが、とても再起を望めない絶望の状態であった。お母さんが居らない為、特に収容した個室に父親と小さな弟妹の一家が看病の為、住居していた。処が症状が漸次好転し疝痛も消失して一般状態が改善された。その時父親が私の部屋に参り「娘が非常に良くなり歩く様になりましたから見て下さい」と云うので部屋に行った処、父親が古着屋で買って来た奇麗な赤い着物を着て、ベッドの上で微笑を浮かべて座っていた。「歩いて御覧」と云うと足取りも確かに廊下を歩き出した。「〇〇ちゃんが歩いているよ!!」との他の患者の叫び声に大部屋の患者さんが一斉に出て来て「良かった。良かった。御目出度う」と喚声を挙げて祝ってくれた。

又二十五才程の奥さんで、腹膜炎の為、蛙の様に腹が膨れ、週一回の穿刺に食餌の残滓が濁った滲出液に混って出る状態であったが、この患者さんも「ヒドラ」併用后は症状が好転し、腹がペシャンコになって滲出液も出なくなった。処が臍の下部に鶏卵大の腫瘤が触れて来た。「今度は癌か?」と恐れ慄いて早速開腹することにした。処が事情を知らない周囲の患者さん達や職員達より、あんなに悪かった腹膜炎が良く癒ったので、大辻先生が調べる為に手術をするんだ等と噂が立ったが、私にとってはそれ処でなく、渋田先生が執刀し私が助手をして開腹した。腹膜は腸が見えない程、真白な線維で蔽われており、滲出液がこの様な状態で線維化して治癒したことを知り早速渋田先生に「内科医はこうして癒すんですよ」と大威張りした。肝心の腫瘤は後壁に出来た結核性膿瘍であった為、これを切除し手術を終った。

以上は「ヒドラ」の偉力特に粘膜結核に著効のあることをまざまざと見せつけられた症例であったが、「ヒドラ」は昭和二十六年アメリカで開発され「ヒドラ」を服用して全快した男女の患者が、手に手を取って踊り狂っている写真迄添えられて画期的結核治療剤として世界に宣伝された。抗研でも早速製薬し、症例を選んで投与したがそれを飲む患者さんを周囲の患者さんが羨ましそうに眺めていたという有様であった投薬してみると宣伝程の速効が見られぬ但名声が一時沈下した。然し二〜三年後に熊谷先生が動物実験及び切除肺の組織所見から「これ程効くとは思わなかった」と激賞され、菌の抵抗を怖れて「パス」毎日、「マイシン」及び「ヒドラ」週二回投与の三者併用療法が最適であることを提唱され、昭和三十年御老軀を提げられて、ウイーン迄出掛けられ、国際結核病学会で自らこの治療の効果に就いて講演された。

入院患者中には空洞患者が多数居り、手術適応の多いことを知った。赴任当時は気管支造影法、気管支鏡、両肺の分割肺活量測定等を行い、他方では外科手術器材を集め、実際の手術を始めたのは、暑さも過ぎた九月上旬であった。

第一例は三十五才の工大職員の右上葉空洞に対する胸成術であったが、第一次手術で第一〜第三の肋骨は支障なく切除したが肺下部の癒着の無い肋膜をウッカリして破り気胸を起したが、当夜は脱気及び酸素吸入で過し大過なきを得た。当時は現在の様に、保存血が無い為、手術の度毎、病院の上に建っていた清水高校の生徒にお願いして手術時来院して頂き採血して輸血した。従って当院でも準備に多忙であり、且患者家族も輸血の費用負担が大変であった。

その后週火曜日と金曜日の二日間、一〜三例宛手術を行い、大体順調に推移した。助手には外科より原田一洋（現室蘭医師会長）、新島昭二（現在宇都宮市在住）の両先生、内科よりは木戸就一郎（現在知利別在住）、高島浩蔵（現在苫小牧市在住）、女医さんの岩田和子（現在旭川市在住）の

諸先生にお願いしたが、内科の諸先生は手術の経験が皆無であった為、手洗いから教えねばならなかった。当時の肺結核手術は最早胸成術の時期を過ぎ、肺切除術が主流であった。

肺切除術は私が抗研に入局した昭和二十三年四月新潟市で行われた日本外科学会で東大のト部助教授（現在金沢医大名誉教授）が二例、清瀬の東京療養所の宮本忍先生（現在日大医学部外科教授）が三例の肺切除術例を報告されたのが初めてであった。

学会から帰られた抗研外科の鈴木千賀志教授（故人東北大学名誉教授、仙台健康保険病院長）は俺もやらねばならぬ。仔分共頑張れと吾々にハッパを掛けた。同年五月抗研で第一例の右上葉切除術が行われ、約五時間掛って右上葉を切除出来、先生は「肺切除術はカモい」と意気軒昂で手術場から出て来られたが、その夜半、突然患者さんはショックを起して死亡した。先生は仰天され且「掌中の宝を取られた」と嘆かれたが、これ以来先生の肺切除術との苦難の旅が始まった。

患者さんは肺切除術と聞いた丈でも身震いして手術を承諾しない。先生は症例を求めて方々に出張されては手術を行った。私も先生の私物であるジュラルミン製の酸素ボンベを背負って、会津若松市の竹田病院に出張した。当時の肺切除術の困難さは、先ず肺門部の解剖が判然としない、気管支断端の縫合が上手く行かず、術后解放して膿胸を起すことであった。当時は現在の閉鎖式循環麻酔器は無く、単にノボカインに依る局部麻酔のみで手術を行ったので、肺門部に触れると猛烈な咳嗽発作が起り、縫合する気管支断端は上下に激しく動揺し、これを縫合することは極めて困難な手技であった。先生の手術を見学された或る著明な外科教授は、あの様に激しく揺れ動く気管支断端を縫合される鈴木先生の技は、正に神技であると激賞された。然も当時はペニシリン以外の抗生物質は未だ現われず、僅かに闇で流れる「マイシン」は一瓦で三千円～一万円と云う状態なので、とても使用出来ず、断端の縫合が少しでも崩れると最早化膿を防ぐ方法が無かった。

昭和二十六年四月の日本結核病学会で「肺切除術」のシンポジウムが決定され、講師に前記のト部先生、宮本先生と鈴木先生が選ばれた。先生にとっては、最初の檜舞台であり、課題は当時の肺結核外科の花形であり、且他の二人の先生は共に東大出身であり、相手に取って不足はないと許り張切り、先生以下吾々仔分も皆を逆立てて頑張った。当時東大からは「学問では決して他の大学に負けないが、結核丈けは仙台に適わない」と誠しやかな噂さが流れていた。

私は病理組織を受け持つことになったが病理学に関しては在学時代常に落第点許り取っていた私ではあったが、肺結核を少しでも良く識りたいと熱望していた矢先であり、喜んで勉強させて頂いた。その上、抗研を創立された熊谷先生は三年間の滞独中有名なアショッフ教授の弟子であるオルト教授に師事され、病理学に関して博学な知識と猛烈な研究心をお持ちになっておられ「俺が抗研を作ったのは、病理をやりたかったからだ」と折に触れ申しておられた。従って切除肺の病理組織研究は、チーフは熊谷先生であり、その下に鈴木先生と同級生の第一病理教室助教授の黒羽先生が当られ、その連絡の下働きに私が当ることになった。

切除肺は先ず私が現物を写真に撮り、熊谷先生と鈴木先生から種々と御指示を頂きこれを病理教室に持参して黒羽先生の御指示の下に切片を作った。熊谷先生は切除された許りの標本を御覧になると、生きた結核菌がウヨウヨしているにも拘らず、手袋もはかずに手に取って御覧になり、時に珍らしい所見を見付けられると「ホー、これは面白い」と子供の様に相好を崩して喜ばれた。標本は熊谷先生の御指示により、マ

クロ（ルーペ）で所見が見られる大きさのツエロイジン包埋切片と、微細な所見を見るためのパラフイン包埋切片の二種作ったが、標本が出来上る迄に二週間程の日数がかかった。

切除肺を御覧になる
故熊谷先生・故鈴木先生と私
（昭和25年10月抗研
私の居った病理教室にて）

昭和二十五年春に、現在の閉鎖式循環麻酔器が現われ、肺門部の解剖も鮮明となり手術手技も向上し、且マイシンその他の抗生物質も、保険で使用出来る様になった等の好条件に恵まれ、肺切除術も危険が無くなり、従って患者さんの抵抗も消え失せて順調に軌道に乗った。しかしシンポジウムには百例の症例が必要と云うので、毎日の様に手術が行われ、従って切除肺の整理に私は多忙を極めた。十月頃よりは毎日の帰宅は不能となり、水、土の二日間丈け帰宅して、その他は病理教室で泊った。その間家内は一日隔きに二日分の食事を重箱に入れ、二人の子供を連れて病理教室に運んで呉れたが、時には教室の前の芝生で親子四人が車座になって握飯を頬ばっては、生き返った様な気持になった。夜は病理教室で毛布に包まり、椅子を横に並べて寝るのだが、段々寒くなると、召集解除時に軍隊から支給された防寒帽と防寒外套を着用して毛布に包まったが、夜半、寒さで眼が醒めると、これ幸と許り起き出して仕事をした

抗研では「大辻は病理の解剖台で寝ている」と誠しやかな評判も流れた。従って就寝時間が段々短かくなり、体重も段々減少して行くのが自分でも解り、弁当を持って来る家内が「貴方は来る度に頬がこけ、眼許り輝って来ますネ」と云われ、学問とはこんなに辛いものかと思った。「アルバイトは命掛けでやるもんだよ」との熊谷先生の御言葉を最大の心の支柱として頑張った

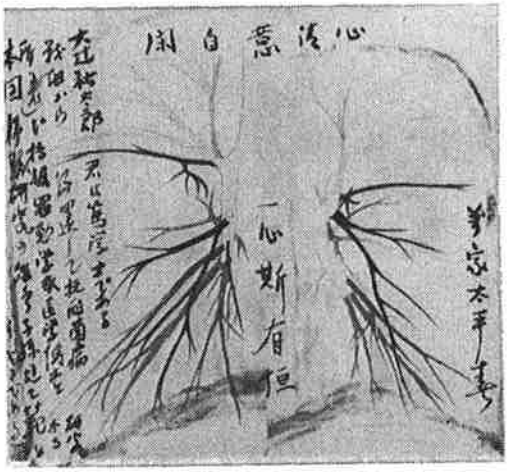
標本が出来上ると黒羽先生に私が臨床経過と所見を申し上げると、先生は顕微鏡を覗かれ、傍でアタッチメントで覗いている私に種々と所見を教えて下さり、私はこれをノートして夜八時には抗研に行き、鈴木先生に同じ操作で所見を御伝えした。皆様御存じと思うが、脂肪組織はヘマトキシリンでは染色されず、無色でキラキラ輝った球状の網の目の組織像であり、最も初期の落第生でも解る所見である。私が先生に、これがお解りになりますか、と御聞きしたら、先生は一生懸命覗いておられたが唸って許り居て返事が無い。気の毒に思って「先生、脂肪組織ですよ」と申し上げたら、余程癪に触わられたのか「この野郎」と怒鳴られた。次いで「大学教授に学問を教えることは実に気持の良いものですね」と申し上げて更に先生を逆撫でした。小学校は五年で仙台一中に、中学は四年修了で旧制二高に進み、東北大学を卒業され、秀才街道を驀進された先生も、多年病理学を留守した御蔭で、脂肪組織をも忘れて済われた

苦難の仕事も翌年三月で終り、シンポジウムには大標本はその侭、映写器で写し、パラフイン切片の所見は東京中野区の写真大学に持参して、カラー写真を撮り映写することになった。当時は未だカラー写真は普及していなかった。鈴木先生の講演時間は三十分であったが、その間の十五分を病理で受け持てと云われ、黒羽先生に原稿を

作って頂いてから熊谷先生に御覧に入れた上、鈴木先生に提出して全く安堵の胸を撫で下した。黒羽先生にとっても、従来の肺結核病巣の組織所見は、凡て屍体より採取した末期の材料の所見であったが、此度は、生きた生体から直接切除した各病型の組織所見であり、且臨床経過及び症状が判然としているのだから、珍らしい所見が沢山見付かり、従って論文も興味に溢れ、且治療方針を示唆する所見も多く指摘された。

シンポジウムの第一席は先生であり、標本の映写も奇麗に且鮮明に写し出し、無事終了した。第二席は東大のト部助教授の報告であったが、病理部門は当時の肺結核病理学の第一人者であり、且当時の東大病理学教授の岡治通先生が担当された為、どんな素晴らしい報告がなされるかと思って内心ビクビクしていた処、空洞の誘導気管支の所見をテーマとし、白黒のパラフイン切片の顕微鏡写真で映写されたが、画面が薄暗く且その所見が判然とせず、報告そのものにも新味が無かった。

吾々の仕事が余りにも素晴らしかったので、嬉しさの余り「これはインターンのアルバイトですね」と隣席の黒羽先生に申し上げた処「声が高い。東大の連中に聞えるよ」と叱られた。熊谷先生からも「緒方君（故人、先代の東大病理学教授）から、仙台でよくこんな立派な標本が作られたもんですねと誉められた」とニコニコ顔で話しておられた。この仕事が御縁で、昭和三十年に黒羽先生は抗研の病理学教授に御栄転なられたし、私も亦、学位論文が出来上った。御蔭様で当時の私は、肺結核のレ線写真を見た途端に、その部位と組織所見が眼前に浮び、従って患者さんに部位、組織所見、治療の方法及び予后等を具体的に説明出来、患者さんの信頼を得た。上述の如く肺結核手術は漸次肺切除術が主流となり、私もこれをやりたくてやりたくて致し方なかった。



故熊谷先生は日本画の大家である。
私を助手にして気管支走行を勉強しておられた時に、大体頭に入ったから画を描いてみるといわれた。それがこの画である。この画を基にして大きな画表を大学の画工に作らせ、昭和27年秋の仙台市における日本胸部外科学会で特別講演を行われた。
原画は記念だと言われて私に下さった。

昭和二十九年春に、閉鎖式の麻酔器が室蘭市立病院に入ったのを幸に、外科の方と一緒になって胸成術に麻酔をかけ、その操作を勉強し、肺切除術の準備をした。同年九月、私一人では不安であったので抗研から熊谷先生の三男で抗研外科講師の直先生に来院して頂き、待望の肺切除術を行った。第一例の右上葉切除術は成功、第二の右上葉切除術も成功したが、万一を懸念し、患者を手術場に寝かせた侭、熊谷先生と一緒に経過を監視して居た処、夜明け頃になって、突然容態が悪化し、酸素吸入、輸血等の救急処置に最善を尽くしたが死亡した。第三例、第四例は何れも成功、第五例は左肺全域の気管支拡張症患者であり、左肺全剔出手術を行ったが、最早閉胸と云う最終の段階になって突然、全手術創よりポタリポタリと出血し、輸血につぐ輸血に依っても止血出来ず、終に死亡した。

手術中廊下に立って経過を固唾を呑んで見守っていた他の人院患者は、輸血が不足らしいとの情報を知り、大変だと許りグル

ープを作って病院前や中央町の街頭に立ち通行人に輸血を御願いしたと云う今の世の中では社会問題になりそうな事態迄招来した。

手術中、患者の絶望が予知された時、私はショック状態になり、とても室蘭には居られず夜逃げせねばならぬと覚悟した。翌日柘植病院長に呼ばれ、「肺結核患者の自然減少は致し方無いが、人工的に減少させるのは宜しくない」と云われ、私も覚悟していたので、後の二例の切除予定患者を残して中止した。

その后失敗の原因を種々と勉強したが、どうも輸血（特にO型）に原因がある様に思われ、当時人工血液を研究して居られた北大生理の蓑島教授を御尋ねしてお伺いした処、先生は「血液にA、B、AB、Oの四型があると考えておられるが、それは間違いである。凝集素に依って凝固するA、B、AB型は存在するが、O型と云うのは両凝集素で凝集しない血液を一括したものであり、実際にO型という血型はない。従って輸血に際しては、必ず両者の血液の交叉試験を実施しなければ不可ない。」と御教示を受けた。成程その后の交叉試験で、同じO型でも凝集する症例があり、先生の御教示は正に天の啓示だと思った。

八月一杯は暑さの為、化膿を怖れて手術を中止し九月より再び胸成術を行った処、或る患者が夜間私の部屋に来て「私に肺切除を行って下さい」と云われた。私は嬉しさの余り患者さんの手を握って「私に切らせて呉れるか」と叫び感激して涙を流した

その后の肺切除術は概ね順調に行われた当時の手術時間は概ね四～五時間で済んだが、遅い時には夜十時頃迄掛ったが、助手の諸先生は勿論、安田、秋山、田保、平沼松島、田村、木下、三浦、西海谷等の看護婦さん達も文句一つ云わず、一生懸命頑張ってくれた。当時機械出しをしていた田保（現在桜庭、当院婦長）さんは私に怒鳴られて泣き出したが、不消毒な涙を拭くことが出来ない。致し方無く消毒ガーゼの両端をコツヘルで摘み、両手を左右に動かして涙を拭いていた。手術が終ると私のささやかな御礼に吉野屋のラーメン一杯を御馳走したが、あの美味しい味は今でも忘れられないと話していた。

当時電話は庶民にとっては高嶺の花であり、私の宿舎にも無かった。手術当夜は肺切除術では徹夜、胸成術では十二時迄在院して手術患者を見守り、大丈夫だと思うと舟見町の宿舎に帰った。その后患者さんに急変があると、病院の小使さんが走って来て、私宅の戸を叩き乍ら「大辻先生、大辻先生」と私を起した。「ソレ来た」と許りに飛び起きて、小使さんと一緒に病院に急行したが、その時の不安と焦燥感は未だに忘れられない。

道内の市立病院で最も多く「パス」を使うのは室蘭市立病院ですから、「御礼に粉末を錠剤に打って差し上げます」とプロパーに煽てられたが、当時「パス錠」は保険外であったから、患者さん達から飲み易くなったと大喜びされた。当時流行していた肋膜外充塡術、即ち合成樹脂球を胸廓に入れて肋骨を切除せずに病巣を圧迫して排菌を止めると云う術式の失敗で、膿胸を起した伊達からの患者さんは、方々で手術を断わられた結果、本院で手術を行い成功した麻酔が切れ、意識が戻った瞬間「俺は生きているのか〃大辻先生は何処に居る。大辻先生は神様だ」と叫んで私の手を握り締めたが、傍で奥さんが声を揚げて泣いていた前記の腹膜炎の奥さんも後になって「私はとても助からないと覚悟をしていました。然し先生が御出でになってからは、これは大丈夫だ、必ず助かると思って、それからは死ぬと云うことを一度も考えなかった。入院患者の皆様は、先生を神様だと一様に信じていました」と誉めて下さった。

私が手術を勧めても、不安その他の事情で承知しなかった患者さんの多くは、再発に次ぐ再発を繰り返して、大部分死亡され

たが、反面、手術をされた方は、その后再発もなく、大部分の方が元気で過され、今でも街で御会いしたり、私の外来に来て下さり、その元気な御姿を見て、本当に良いことをしたなと心から喜んでいる。

抗研に於ける五年間、室蘭市立病院で手術に明け暮れした三年間は、年から云えば中年だったが、私にとって、全身これ肺結核治療に邁進し、情熱の限りを尽くして力一杯に生き抜いた、正に私の人生の青春時代であった。

昭和五十八年六月二十八日

終り

―グループ紹介―

女医会の今昔

安立かほり

私が二十二才で現在の東邦大学を卒業し、市立病院内科に席をおきました頃は、室蘭では「女医」が珍らしく今度獣医さんが来たという笑い話もあり、女性の職業としては尊敬と軽蔑の入り交ったむづかしい世代でした。

現在の女医さんの姿を見る時、今昔の感深いものがあります。

女医会の発足と言えば記憶は定かではございませんが昭和十五年頃、桜庭シゲ先生と小熊セツヨ（現在早来で開業）石井康子（現在宝塚で開業）矢野セツ（豊浦で死亡）先生達の中に戦後、私も加り五人でした。ただ何となく集まり、四方山話に花を咲かせて食べて飲んで皆様のファイトを身近に感じ、新たな情熱を沸かし明日へのエネルギーの糧としたものでした。其の中の一人が欠けても淋しくそれだけシッカリ手を組み合っておりました私の後輩小熊、矢野両先生が去り、若く美しく冷悧な石井先生も転居されて女医会も影が薄れて参りました頃、高橋ハル先生が入会され、新風を吹き込んで下さいました。その異風の存在は男性的大胆さに加えて女性的緻密さの両面を持たれ、只々驚嘆したものです。昭和三十五年頃、上田静江先生、四十五年に遠藤征子先生を迎え、徐々にメンバーが増え現在では順不同ですが神島恵子、横山洋子、庄司礼子、栗林博子、大久保淳子の諸先生、また遠くは伊達の斉藤マツエ先生、更に最近は上田病院に韓国より安岡英姫、金本順奉先生と多彩になり現在総数十三名、うち東京女子医大出身四名、札医大四名、北大二名、京城大二名、東邦大一名となっております。

以上でテーマの「グループ紹介」として判明した先生方だけ記載しました。

今や女医会は単なる社交の場ではなく市立病院の横山先生による肺癌のX・Pの説明やら大久保先生の眼底血管の貴重な資料をスライドで拝見して誠に有意義な会となりつつあります。

最後に中堅の女医の皆様に申し上げます。女医とは男性と違い医師、主婦、母とその任務は重大で、度々会合を持ちたくとも思うようにならず不定期会とならざるを得ないのが実情です。けれど、どうか会が益々充実し色彩豊かに国際的華かさを増し、勉学と親愛を深める場として発展させて頂くように祈って止みません。

座　談　会

「中島の紅い灯・いま・むかし」

飯島三男　大岩昌生　大谷地公迪
黒光康夫　畠山正照　本庄晋一

編集委員　（加藤、高島、三村、村井、青木）

加藤　お晩でございます。昨年の「波久鳥」三号に、長老の先生方を中心として浜町の紅い灯、青い灯を語っていただきました。第四号は中島の先生方で、とお約束したわけですが、さすが蘭東の雄、中島の主というべき顔振れでございます。中島界隈発展の歴史を織りまぜながら、珍談、秘話の一端も披露いただけたならと存じます。

三村先生の司会でスタートしたいと思いますが、本庄先生、中島には何時から。

本庄　ぼくはねえ、古いんだ。

黒光　古い、古い。

飯島　先生が来てから中島が出来たようなもんでしょう。

◇◇　中島一帯に街というか、飲屋ができたのは何時頃ですか。

本庄　それはネ、ごく最近なんだ。サワさんがインターンの頃はね—

高島　ぼくが二回目だから。

飯島　大谷地、後藤、上田智夫の連中。

本庄　その頃は飲屋はなにもないんだ。

大岩　谷地側は何もなかったさ。

大谷地　本通りが一本あって、川が流れていて、それだけの話。

本庄　ナントカ横町なんて出来たのは、ごく最近のことさ。斉藤義寛先生とか、あの先生達はネ、室蘭の八幡さんの下で飲んできたんだ。

黒光　吉井さんの弟さんとかネ30年の前なんて青い灯、紅い灯でないのさ。

大谷地　ぼくの時も何もない。せいぜい輪西—バスに乗ってね。

大岩　大通りの反対側に一軒出来たのが…シンセンって言ったかな。

本庄　一番古いのはね、やっぱりフウゲツですよ。これはネ、サワ先生、それと四人居たんですがね、その先生方はフウゲツに入りびたりでした。

黒光　今の場所ではなくてパチンコ屋の裏—あれは古いよ。

高島　ぼく達は26—27年のインターンだから…その頃やっていた。

大谷地　病院で飲んで、ラーメンとってさ、それから何かにかこつけて出た事はあった。

大岩　歴史から見れば、中島町の話の前に「輪西」がワンステップあったんだ。

黒光　そうだ。このあたりの連中も皆、輪西に行ったんだ。

◇◇　ぢゃ輪西をやりますか。

輪西、そのころ

◇◇　大岩先生は輪西多かったでしょう

大岩　おれはやはり浜町だナ。その帰りに寄ったりで、まあ一頃、行ったことは行

時・昭和58・7・25
処・中島町「薔薇館」

ったけどね。

◇◇　常盤とか白鳥クラブみたいな所、あったんですか。

本庄　あった。カドヤ、キクスイ…カドヤは小料理屋だ。三味線きこえたりしてさ。キクスイも小料理屋だ。

大岩　フロアはあったよ、かなり広い。中島先生の裏、何て言ったかナ。バーなのかキャバレーって言うのか、へんな所あったよ。中島先生しょっちゅう行ってたとこ

本庄　その頃はウィスキーなんかないんだから。だいたいが日本酒だもの。ウィスキーを水で割って飲むなんてのは、ごく最近だものナ。

◇◇　女性はどんなでした。

本庄　そりゃあ、もう品良かったですよ今みたいに下品でないですよ。（店の女の子が顔を見合せて苦笑する）

大谷地　その後がトリス・バー。いまのサントリーの前。テレビが放送始めた頃ですよ。サワさんとよく行ったもの、トリス・バーは安くっていいんだ。

◇◇　その頃、遊廓ありましたか？

（皆紳士のせいか赤線については詳かではない。ワニシとマクニシの取違え、赤線廃止年度の勘違いがあり、本庄先生は昭和13年には既にマクニシ遊廓はなかった、見なかった、などと言われる）

大岩　いやあ、赤線地帯って…ライン引いてあったよ。あすこは。

黒光　輪西にあったよ。

本庄　そうか、おれは知らないな。

黒光　アレ、冷やかしに行ったことあるよ、先生と。（笑）

大岩　紅殻格子が並んでいたもねえ。

黒光　ウン、記憶あるよ。上らなかったから、よくは判らないけど27～28年頃でないかなあ。

大岩　消防署のところから曲って行くでしょう―キリヤがあって―あの小路。

本庄　平間医院でないの、あの小路。

大谷地　スナックの小路ぢゃないの？

大岩　その前は赤線さ。終戦当時は看板あげてたんだけど、終戦後はあいまいになっちゃったんだ。

◇◇　飯島先生は何処で飲んでました？

飯島　よく判らないんですよね、そういう事。マジメだったから…（ふうーん）

大岩　輪西のことなら東先生に聞けば一番だな、主だから。

飯島　東さん、国本さんネ。結局はみんな室蘭まで出たんでしょう。

中島にもどる

◇◇　浜町に行かなくなったのは何年頃

から？

本庄　ごく最近だ。ここのママがこっちへ来てからだよな…そうか五年になるか。

大谷地　第一ハシモト、GSビルが出来てからですよ。パッとこうなったのは。

◇◇　なんとか新地とか、あのバラックは何時頃建ったんですか？

本庄　あれはごく最近ですよ。あのバラックはそもそも車庫だったのさ。ところが車庫よりパイイチやった方が儲かってるんでみんな…

大谷地　先生の開業のときありました？

本庄　40年だけど、ナイな、ナイ。

大谷地　ぼくが43年、なかった気がするなあ。

黒光　中央医院の数田先生が亡くなられて、萩原先生が来て、彼はコマメに歩いたよ、この辺。あの頃はわれわれ全然出ていないんだ。評判よくなかったし柄わるくてね、普通の人は行かない。でも中島新地とかナントカ、色々あったわけ。

本庄　ああ、判った。だんだん思い出して来た。（笑）一番先に飲屋が出来たのはすぐそこのネ、そこから出て、ぼくの所から一寸行った所のネ、今のすし屋のあの一角だ。元は自動車の修理工場があってね、そこが一番古い。そうだ発祥の地だ、原点だ。その頃はちょいちょい行ったよ。なんだか通り―って言ったな。

畠山　三つ程通りがあって、皆名前がついていたでしょう。

（チェリー、提灯、中島新地等々から、一番街、五番街など飲屋街の名称談議）

本庄　ママ、電話かけてくれ。あすこの通りは何て言ったかオレ聞いて見るから。

（Sさんなる人物に電話をかけている間にも歴史が歩みつづける）

畠山　髙島先生、三友会ができたのは何時ごろでした？

髙島　おれの開業したのが44年で、その時入らないかって言われたんだけど、輪西でやったの。ミスズかな、おでん屋でね。

大岩　あの頃、新日鉄はクラブ使っていたろう。町に出る必要もなかったんだ。碁うったり、飲んだり…ネ。おれも何回か行ったけど、当時としては美味いものも喰わせるし、いい酒も飲ませたナ。

黒光　実質的にはGSビルができて、それから中島が一変したんだ。あれは何年だったかナ。

畠山　私が中島に来たとき、まだGSタウンはなかったよ。

大岩　大谷地先生も行ったでしょう、クラブ―知利別会館に。あれが本命で、こっちは問題でなかったんだ。

大谷地　病院の懇親会はね。まず会社の附属施設の会館を使って、飲んで、二次会のお好きな人は車を使ったかどうかは判らないけど、蘭西に行ったの。すべて蘭西。小路に行った人は個人ではいたと思うけどグループで行く所はなかった。

大岩　社宅のおっかちゃんがアルバイトやっていたナ。

黒光　夜の二時、三時に電話かかって来て往診に行くことがあった。行くとね、おっかちゃんがそこで働いてるワケ、旦那が来て待ってるワケ。お客とワァワァやってるのを見て旦那が腹立てて…ネ。それで往診よく頼まれたもの。

大岩　そういう一時期があった。もう一つの流れはネ、それが終って、蘭西から美人が流れて来るようになった。それから現代の歴史が始まったわけさ。

黒光　GSビルが出来て、あちこちから集ってくる様になったワケ。

畠山　三友会で麻雀の後、中島に寄ってすこし飲んで、髙島先生とか熊谷先生とか一緒で結構やり出した。GSビルの出来る前でもね。屋台横町みたい感じで、バァさん一人居て、カウンターがあって奥に座敷があって、若い女の子がいて、大抵そんな感じでしたね。

◇◇　ぼくは49年以降は知ってるけど、その頃からなんですね。賑やかになったの

は。　本輪西はどうでした？
黒光　ウン、おれ本輪西に居たからね、帰りに松原先生なんかと…コミチかな。
大谷地　区分的に行ってたね、先生たちはネ。中島よりむしろ本輪西ってこともあった。蘭西は遠いから今日は本輪西といった工合。
大岩　古代史はそろそろにしないと終らないよ。
（このとき、本庄先生の電話が終って）
飯島　（メモを読む）昭和38年春、工場をスナックに改造して、その横町をアケボノ横町という。36年にシンセンという小料理屋があった。
本庄　そうなんだ。春にアケボノ横町にスナックらしいものが出来て、秋に立派な建物が出来、すし屋が出来て、どんどん儲かって儲かって仕方がなかったそうだ。
◇◇　先生、わざわざどうも。

現代史にうつる

◇◇　ざっと勘定して、今何軒かな。
本庄　一八〇軒とか言ってたな。
（ママ―私達来た時53年は四〇〇軒）
黒光　組合に入っているのが六〇〇軒ぐらいだそうだ。
飯島　つい二、三年前が七〇〇軒。
黒光　未加入もいれれば千軒近いな。
大岩　本庄先生、千軒みんな廻っていないでしょう。
本庄　おれは此処しか来ていない（笑）
◇◇　昔の女性と今の女性と比較して、どんな印象でしょうか。
大谷地　女性と言ったって当時はオバさんしか居ないんだから。
◇◇　早い頃、寿橋のタモトにポツンと飲屋があったでしょう。ホステスのおばちゃんが二人、その会話がね、あんた今晩のお惣菜何にする？あそこのカレイ安かったよ―楽しいような、ゲソッとするような。
大岩　さる先生と輪西で飲んだ時、大岩先生ちょっと話があるからつき合ってくれってね、車で出たら〈おれにメカケがいるから見てくれ〉っていうワケさ。嘘か本当か判らないんだが、それが寿橋のタモトさ
黒光　おれも行った。三人一緒だよ。
大岩　そうかい一緒だったかい。メカケ見てくれって話は？
黒光　いいや、知らないよ。
大岩　かつがれてるな、と思ったけど正式におメカケ紹介なんて言われて、目がくらんでよく見なかったんだ。（笑）
◇◇　本庄先生、通った女性いましたか
本庄　ぼくは…ないね。
畠山　あそこで一回あったんだよね。
黒光　イヤ、噂は聞かないよ、先生のは
本庄　ぼくはネ、物事に熱中しない男だから―全然ないね。
◇◇　むこうのバラ館の時は？
本庄　相当通ったナ、GSの頃は。通ったですよ、ナァ一番多いんでないかナ。このママも若かったさ（大笑）
黒光　現代史となれば、カレとカレでしょう。あとクマちゃん、タネちゃん。
（畠山の番だよ―笑）
大岩　函館に行ったときのナニガシ…あれの首謀者は先生だって話だよ。
髙島　いやあ、そんなことはない。
黒光　タネさんに聞いたら、あれは髙島だよ、と言ってた。
飯島　斉藤義太郎先生とか昔のエライ先生方が綺麗どころを連れて行ったのに較べたら可愛らしいもんさ、あの連中のやることは（笑）
本庄　そういう人はいないんでないかな現在生きてるのでは。あの頃の会計その他の苦労話、善弘先生なんかがよく話すよね
飯島　若い奴等から当時で三千円集めてお前等もう用ないから帰れってネ、コボシていた先生も居たけど、でもあの先生方、結構二次会の後仕末していたんだよ。
本庄　要するに人間が大きかったんだ。
飯島　今は駄目さ。編集委員会がだいた

い、こんなケチな座談会なんだから（笑）

◇◇　幌別の先生方、中島に見える？

飯島　現在は出て来ない。昔は狩野、深瀬、皆川とか、伊藤貢さんの居た時ネ。ホールインワンの得意な先生も居てネ、会があると必ず出て来る、間で消えちゃうの、最後にはちゃんといるんだ。

大岩　酒が好きでないから別な道で消化するより仕方なかったんだナ。それにつき合わされるからユルクないんだ、おれ。

飯島　グルだと思われて（大笑）あの連中、登別から幌別から室蘭まで行くんだから立派だったよ。

話はずんで

本庄　ふた月ぶりだよ、ボクは。ここに来たの。

畠山　でも毎晩散歩してるんでしょう。老人っていったら悪いけど、大抵は朝、散歩するのに先生は夜散歩するんだから。

本庄　マジメだよ、ぼくは。ただ、ぼくはネ、メカケでも何でもないよ、間違わないで下さいよ、こういう所の女性に一軒店を持たした事あるんだ（全員ホホウー）紹介の労をとっただけ。その店に時々行ってみるの。どうしてるかなあーと。いやあたいした繁昌しているんだ。

飯島　ぢゃ今日の二次会はそこで（笑）

本庄　そしたらね、その店にネ、実は四日前に行ったんだ（笑）ところがね、子供だよ、スナックに子供三人つれて親子が来てるんだ。三才ぐらいの子供がチョロチョロその辺遊んでるんだ。

いやあ、この店もずい分変ってるなと思って見ていたら＜アラ、本庄先生でないですか＞って言うんだ。その客がね。ああ本庄だよ、あんた誰？＜わたしです。○○です＞って言うんだ。昔、看護婦でいた○○さ。あれが夫婦で子供つれて来てるワケさどうやって結婚したの？って聞いたら六年生の男の子が＜スキーで知り合ったんだヨ＞って答えるんだよなあ…

スナックもああいう風になると立派なもんだ。

飯島　いまに先生も孫つれて飲みに来るんぢゃない？（笑）現代ともなれば畠山とか三村とか神島兄弟の時代だけど、畠山先生、何か裏話しなさいよ。

畠山　いやあ、もう忘れてしまった。私は五番街好きだったから此の辺で飲んでいたんですけど、会の後なんかベンケイ、ジュラクエンに結構行ってたんで、たまには中島に行って見ようって焼鳥なんか喰いながら、そのうちニホンバシ見つけましてネ種田先生を一回連れて行って後は放っといたんだけど、何となく集る様になって、そのうちGSも来たし、ワーッと医者連中皆来る様になった感じですね。

◇◇　PINKは蘭西とこっちとどちらが早いですかね。

畠山　こっちですよ。あそこの角のパチンコの二階に出来たのが最初なの。ほんとうのPINKの出だしネ。あのピッカピカのギャンギャララの（笑）あれ？おれ何人か連れてったけどなあ。

髙島　おれは行かない。知らないもの。

本庄　今はどうだい。

畠山　四年程行ってないから判らない。一回ぐらい行って見たいとは思ってるけど

飯島　四年ってことないさ、一年位だよ

黒光　結構若いのいるよ。生命保険の診査によく来るんだ。二十歳前後ぐらい。

大岩　みんな、こんな経験ないかい。学校の身体検査の時診た女の子がホステスになってさ、手を握ったら＜アラ、大岩先生、ワタシ知ってるわ＞って言われて、ワーッと手を引いてさ。多いんだよね、この辺。（爆笑）

黒光　それなら、しょっちゅうだよ。

大岩　あれ困るんだよね。家に帰ってから大岩先生に今晩手握られたなんて言われたら。

本庄　いや然しね、ぼくらも若い時、二

十歳代の時ネ、銀座、新宿のキャバレーに夢中になって通ったことありますヨ。夢中で…。なけりゃ変でしょう、だいたい君（笑）あんただって、君だってあるでしょうおればかり言わせるなヨ（爆笑）

大岩　先生、おれのはね、意味が違うの

本庄　いやあ判る、わかってる、そういう時代もあったろうってこと。あるさ、人間だもの。

（大岩先生、仕方なく合槌をうって、皆大いに笑う）

飯島　つぶれたバーの話、聞こうよ。

髙島　つぶれたわけぢゃないんだよ。あれはね、五万円出して二万七千円もどって来たんだよ、分けたらネ。五―六年位前かな。飲屋ってのはママがしっかりしてないと駄目だね。安く飲めるというのでやったの。それでも二万ナンボ戻って、安く飲めたんだから、元は取ったの。

本庄　髙島先生、斉藤先生、それから？

髙島　十人ぐらい居たかな、まあ、いい経験ですナ、あれは。

畠山　まあ、やるんだったら自分とこの事務でも出向させてガシッとやらなきゃ駄目です。自分の小遣いさえ出ればいいんだったら、きちんとした女の子一人おいてやったら、こんな楽な商売ないよね。

髙島　親交会ではスナックは経営しないということネ（笑）

本庄　もしやるとしたら会長は誰だ。

髙島　本庄先生さ。

本庄　イヤ、おれはゼンコ勘定駄目だ。

髙島　成功例を持ってるから（笑）

◇◇　そろそろ一時間半を過ぎました。これから本当のお客が来ますので…一言づつ中島町について。

本庄　中島町はネ、飲屋なくして立っていかない街だ。患者の大半は飲屋の女性ですワ、みんな健康保険持ってますよ（笑）

黒光　昼間マジメに働いているからストレスたまるワケ、それで散歩かたがた出てくるとツイツイのどが乾いて寄ってしまうワケ。

（夜中の三時までですか、先生。とママの言葉に一同大笑い）

黒光　いやいや、十二時頃帰ってるんだよ、いつも。

大岩　成長株だって言うよ。

畠山　皆さん四十にして起つとかで、四十過ぎてから、また飲み歩いて狂っている様ですが、私は酒、煙草いっさい断って中島町と無縁になろうとしていますが、どんなもんですか（笑）

大谷地　中島町に客引きが立つようになったのはコレ、偉大なる進歩ですよ。昔は考えられなかったもの、客引きなんてね、あんな谷地にねえ…（大谷地の声あり）

飯島　おれが中島に住んでいたのはね、昭和二十八年から三十二年までの五年間ですよ。いま住んでいたらなあと思っています。浴衣がけで下駄はいてネ、ブラーッとそこここ歩いてみたいなあーと思ってますよ

大岩　紅い灯、青い灯と言えば、先づ浜町、そして現在ではポーンと中島町に跳んで来るわね。しかし歴史を語るなら、さっき出た輪西、母恋だってあるんだ。

畠山　本輪西…室蘭の反対側の入口だからね。

大岩　そう、それからもう一つ、登別温泉にも歴史がある―ハイ（笑）

髙島　ママに怒られるかも知れませんがこんな店で申し訳ありませんでした。

本庄　いやいや、これ以上の店ないよ。

飯島　金をかけなかっただけの話。

◇◇　村井先生、最後に。

村井　私は酒も飲まないので座が白けるかと心配していましたが（仲間いるんだもの飲めゃいいでしょう―なんでも勉強だもの―今度誘うから出てらっしゃいヨ―みんな途中から飲み始めたんだ…交々の声がかかる）打つ買うはいいんですが飲むのが駄目でそういうことで大変いい座談会に出させて頂いて感謝しています。有難うございました。（拍手）

あんらくいす

―学校保健―
心臓検診のことなど

種田　豊

昭和五十八年度室蘭市の心電図心音図判定委員会も、上田智夫、熊谷、畠山、東浩堀尾、柳川、吉田勝太郎先生ら昨年まで参加して頂いた先生方また受持ちの学校医の方々が参加し、七月八日に終了した。（森川先生には今後結果の集計等うんざりするような仕事が残っている）今年は市立病院の先生の直接の協力も得られたようだし、森川先生の指導もしっかりしているし、先生に担当理事になっていただいて、私は「よかった」とつくづく感じている。

昭和四十八年、妙ないきがかりから、私は室蘭市医師会の理事にさせて頂き、当時の佐藤善弘会長に学校保健担当を命ぜられた。（私を理事にした仕掛人の先生はとうに室蘭に居ない。そして二期で交替と約束した先生方も、とうとう私と理事を替ってはくれなかった）。最初の理事会の時だったと思う。佐藤会長が、私に四日市方式だとか、何とか注意されたが、私には何のことか判らなかったことを思い出す。もっとも今でも判らない。多分その頃実施していた大気汚染の恐れのある地域の特別健康診断に関係してのことであったのだろう。当時私は学校医でもなく、学校保健について何も知らなかった。あれから今年三月まで十年間、学校保健担当理事を勤めさせて頂いた。会員の諸先生には、大変御迷惑だったろうと思う。

先生方に次々と色々なお願いをした。しかしこれは私だけのせいではない。学校保健法施行規制が昭和四十八年に一部改正され、四十九年から実施されたからである。（五十三年度更に一部改正された）その内容は先生方も御存知のことであるが、記録のため変更の意義を書いておく。

昭和三十三年の学校保健法の制定当時から児童、生徒、学生の疾病像は大きく転換して来た。従来の伝染性疾患はほとんど姿を消し、特に学童死因の重要部分を占める心臓疾患と、長期欠席の最大原因である腎臓疾患とが大きな問題となって来ていた。また慢性に経過する異常、う歯、近視、肥満傾向など主として生活習慣に起因する疾病が問題になってきた。さらに日常の学校生活での特別な配慮を要する疾患として、気管支喘息、遠視、起立性調節障害、心因性疾患（心身症）などが注目をあびるようになって来ていた。そこで尿検査、心臓検査が取り入れられ、その他脊柱側弯症の三

十秒テストが示され、眼科等の検査法も変った。結核予防法の改正から結核検診の対象学年も変った。学校伝染病の取り扱いも新しい知識により変更された。この変更のため、私は学校保健について、いくらか勉強しなければならないことになる。

室蘭市医師会の小中学校の検診に少しだけ触れたいが、その前に私がお世話になった室蘭市教育委員会の担当の係長だった方達のことを記しておきたい。

渡辺礼一氏。学校保健法施行規則改正当時の担当であった。自宅は絵鞆町の筈であるが、私の所迄来て深夜まで何度も話し合った。正式に使用することになった保健調査表は、彼が方々から集めた中の東京都練馬区のものをモデルにしたものだったと思う。尿検査の結果の取り扱い等も彼が手がけた。医師会と教育委員会との意思疎通が円滑になった基礎を渡辺氏が作った。

藤田久義氏。彼こそ室蘭市が心臓検診に心電図を採用した功労者である。彼は全国学校保健大会でだと思うが心臓検査に心電図の必要性を痛感して来て、その採用を私に要請した。私もそれを必要と考えていたので、この話は割合簡単にまとまったように思う。又彼の時にその功罪は別にして、就学時の検診をアンケートによりスクリーニングをして対象児童の一部のみに実施する方法が始まった。

江頭洋志氏。以前から知っていたし、彼の自宅が白鳥台のため役所の帰りに私の所へよく寄っていった。彼は保健調査表を現在の形へと変更をした。又、心臓検診を現在の心電図心音図自動解析装置に変えた。この装置の取扱い、結果の処理に大変な苦労をした筈である。また学校保健会の設立に情熱を傾けていたが、それは成らなかった

小林慎弥氏。小林さんには医師会の事業としての高一の心臓検診の実現をお願いした。（教育委員会の吉田さん、石岡さんにも大変お世話になった。）

室蘭市の心臓検診であるが、先に述べたように藤田さんの提言があって医師会の学校保健対策委員会、学校医部会、理事会で検討した結果、昭和五十三年から小学校四年生の全員を対象にして心電図検査を実施することになった。この方法は五十五年迄三年間続いた。心電図判定委員の先生に全心電図を見て頂いた。確かに毎年心電図の異常は三・五％程発見されたが、私達が目標としたそれ迄見逃されていたと思われる先天性心疾患や後天性の心筋疾患は殆んど見つからなかった。一方、心電図だけの検査よりも心音図を加えた検診では、心疾患を二倍以上発見出来ることは常識であり、そのための学童用心電図心音図自動解析装置が販売されていた。

私はこの装置の導入を強く要求した。原田会長の尽力もあって室蘭市、室蘭市教育委員会は、その必要性を理解してくれこの装置を購入した（私は更にもう一期理事を勤めさせて頂かざるを得なくなった）。児童生徒の心臓検診を最善のものとするためにこの検診の対象を小一、中一の全員とした（暫定的に昭和五十八年迄小四も全員、昭和五十七年から高一も対象）。ところがこの装置は、当然のことだが完全なものではなかった。取り扱いにもよるが、検査対象の五十％以上にも心雑音ありと診断したり、一方では明らかな心雑音も異常なしとしたりすることもある。しかし聴診で心雑音のある児童は一人も居なかったと云われる学校医もおられるのだから、この装置を上手に利用すべきだと思う。事実、判定委員会の眼での診断では見逃すような心筋の異常を装置は発見した例もある。更によい装置に変える迄はこの装置が室蘭市の心臓検診にそれなりの役割を果してほしい。

「道の会議に出ても、室蘭市の学校保健が全道で一番進んでいる」とかつて江頭氏が云ったことがある。事実かどうかは判らないし、他の都市の秀れた点も知っている。とにかくこの十年間学校保健について室蘭市医師会として皆さんの御協力を得て、一

応の成果を挙げえたと感謝している。
これからも会員一同が今年度から学校保健を担当された森川理事に協力して室蘭市登別市の学校保健を更にすすめて行かれることを切に希望して止みません。

チベット弥次旅行記

米沢　堡

表題の「彌次旅行」は本来なら彌次、喜多両名ですが、気心の知れた相棒がいなかったため彌次としました。世に言う長年月の鎖国政策をとっていた秘境とやらに心惹かれ、河口慧海師のチベット旅行記を読み先づはチベット行を決めました。五六年八月上海から成都経由チベット拉薩（ラサ）に行って来ました。御承知と思いますが、西蔵は平均四千米の高地ですので、健康診断書が必要です。柘植大先輩より合格証を戴き提出しました。高山病対策に朝寝呆の小生、早朝に電信浜より追直へと約二週間呼吸を整え乍ら御遍路を続けました。

上海から成都への飛行機は途中重慶か武漢で給油のため一時着陸し、成都では一泊翌朝はソ連製の中古の五十人乗、プロペラ機のイリューシンです。内部設備もお粗末で、温度調節のため、頭上の天井からドライアイスの白煙が吹き出し、所々で雨漏り様の滴がたれてきては一寸した騒動です。出航後一時間もすると、南北両側の窓から奇々怪々な山容をした六―七千米級の雪山が蜿蜒と眺められ、いよいよ秘境の感を深め退屈しません。二時間半で河川敷の原っぱ様の空港に着く。周辺にはターミナルビルも無く、唯空港入口に柵があるだけ。扉が開きタラップに出ると空はあくまでも青く、日射は強く眩しい位だが、ひと息空気を吸ってみたら、実に美味い。飛行機のそば迄マイクロバスが迎えに来ていた。一行は十五名で、男女別は約半々、小生より年嵩の者は東北福祉大学長と松澤なる御老体でした。

ラサ市街地迄は河川沿いのガタガタ道を二時間以上かかる。やがて御老体が具合いが悪いと訴え出し、旅行用の空気枕様で五倍大の酸素バッグからゴム管を鼻孔に入れ酸素吸入し乍らも宿舎迄ぐったりしていた他にも数名頭痛を訴え、他の酸素バッグで交替に御世話になっている。バスは市街地を過ぎ、郊外の中国接待所に着く。接待所はヒマラヤ山麓大岩魂崖下の軽斜面に建っている。コ字型のビラで客室は七室位。廿数棟が広大な敷地内に整然と建ち並び、斜面の頂点に立派な洋風食堂がある。学長と御老体は旅装の儘ベッドにもぐり込む。松澤爺さんは小生と同室となり、面倒をみてやらなければと思った。

団体旅行での自己紹介には、小生常に書道と空手の師範と称しているが、皆さん成程と了承して呉れる。なまじ産婦人科医と言ったら驚ろかれるのが関の山でしょう。

夕食のため緩斜面のアスファルト道を一呼吸一歩のリズムで食堂に向う。低地並みの歩行では心悸亢進、頭痛を覚える。中国旅舎の食事は中華料理の中の上程度の物で塩分少く、炒めものも植物油を使い、野菜も充分理想的でした。昼食夕食時には麦酒は飲み放題、朝食時には自己負担である。高山病に罹らぬ為の注意として、大声で話さぬ事、忙がぬ事、水分を充分摂る事、高地に馴れる迄アルコール飲料を慎しむ事等注意があったけれど、小生晩酌のない食事など味気なく、習慣通りに麦酒を飲み、朝食時にもキャッシュで麦酒、同行者にもすすめたが付合が悪い。食後部屋に戻ってみると松澤老唸り声をあげている。酸素バッグはふくれてはいるが、バッグの内圧と外圧の差が僅かとなり（バッグ自体収縮力がない）鼻孔呼吸丈けでは酸素吸入が出来ない。早速ショルダーバッグを酸素袋に上げ

てやると、かすかに酸素流出の音が聞え唸りも止んだ。

太陽が沈むと急に気温が下り、ビールの酔いも醒めて来たので持参のブランデーをチビリチビリやり乍ら簡単なメモを手帳に書いていると、松澤老小さな声で寒い寒いと震え出した。服務員室から毛布を借り掛けてやる。湯湯婆（ユタンポ）等もなく、卓上の飲用水のガラス容器に熱湯を入れタオルで包み足の間に入れ、女性添乗員から使いすてカイロを二個出さして体の両側に入れてやったら大分気持よくなったらしい。夜も更け、パジャマに着換え、ベッドに入るが、やがて尿意を催し厠に行き排尿した。尿と共に熱量が体外に排出したためか、とたんに寒さに震え出しベッドの中で震えを我慢したこう寒くては松澤老の苦しみに、胸を開けて聴診器を当てる事も出来ず僅に毛布の中に手を入れて触脉する丈け。朝四時過迄服務員室の酸素ボンベから酸素補給に小雨降る通路を何度も通いました。

ラサ滞在間の経験から夜間小雨があると呼吸が少し楽になる。H_2Oが分解してHとOになる訳では無いと思ふが、現地人もそう言って居る。今日の観光を考えると徹夜で看護も出来ず、添乗員を叩き起し人民病院に護送を指示しました。別室の学長は添乗員の僅かな看護で苦しみに耐えて居たらしく一緒にジープで送り出し、ホットして小生も睡眠をとりました。朝食前ジープが戻り学長は即刻入院、松澤老は注射投薬を受け一日要安静の指示を受けて来ました

翌日ポダラ宮参観にはフーフー音を出し乍らも松澤老も参加した。ポダラ宮はダライラマの居城で、小山の上に十階位の建物が、末廣がりに立てられ、上部はダライラマ用で暗紅色、下部は白色に塗られ、ラサ周辺どこからも朝夕の光の変化と共に眺められる。我が観光団体も首からカメラを二—三台掛け、建造物や街の様子をパチパチ写真専門家みたいである。朝食時ビールを飲む、旅中の朝酒は誠に甘露です。

ラサ滞在五日間中の観光はポダラ宮、大昭寺とそのぐるりの八角街、夏の離宮、ノルブリンカ庭園、セラ寺（河口慧海師の修行した寺）レボン寺、革命民覧館（チベット解放前の様々な拷問具や切り落された腕子供の全身の皮膚等々、チベット時代を批判し共産圏になって幸福だろうとの宣伝用）閑話休題。此処迄筆を取ったものの仲々先に進まない。親交会から若い美人秘書を派遣して貰い、口述筆記して貰ったらなーと悔まれました。

小生の冗長な駄文を読まれる嫌さを考えると、チベットの単行本を読まれ、百聞は一見に如かずの通り、チベットに行ってみませんか。話では前回のチベット旅行団が空港に着いたとたん死亡、又昨年八月小生はインドの西北部ヒマラヤ山麓のラダック地方に行った時も、別の団体員の一名が三千五百米位の高地でも死亡したと、旅の間に聞きました。余り恐れる事もありませんが、一例として記して置きます。序の口だけにして、本論は次回後とする事をお許し下さい。

（つづく）

LADAKK（スモールチベット）にて
（一九八二年　八月）

音楽馬鹿の記

安斎哲郎

音楽家仲間の間には「テノール馬鹿」「ラッパ馬鹿」という言葉がある。テノールにしてもトランペットにしても、頭のテッペンから音（声）を出す努力ばかりしているものだから、ついお脳の方の風通しがよくなりすぎて、世間的な常識のない、お人好しでオッチョコチョイだが傍若無人な変人が多いという意味である。だが考えてみると、テノールやラッパに限ったことではなく、およそ音楽などを趣味にしているものは先ず程度の差はあれ例外なく「音楽馬鹿」の名に相応しい人ばかりであろう。いや音楽に限らず学生時代からの趣味を下手の横好きで少しも懲りずに何十年も続けているものなど、皆「――馬鹿」の集合であろう。その様なわけで以下に述べるのは不肖私の「音楽馬鹿半生記」である。

音楽馬鹿には大別するとタコ形とサザエ形とがある。前者は八本の手をありったけ使って音の出る道具を何から何まで自分で鳴らして見なければ気がすまないというタイプ、後者は一つの殻にこもって自分の楽器を根気よく熱心に練習するタイプである私とて始めからタコ形であった訳ではなく少年の頃はまずは親の言うことも聞いてピアノなど熱心に習っていたものだが、今にして思えばその先生が本職のピアノ教師ではなく、作曲家の内職であったことが混乱の始まりであった。つい、無味乾燥な指の練習よりは和声学や作曲法の勉強の方が面白くなり、小学四年にしてそのピアノ教室のお稽古会で自作の歌曲を姉に歌わせて、自分でピアノ伴奏をして発表したという輝かしい記録を誇っているのである。小学六年になって、ピアノは受験の為に一旦止めたものだから、中学生になっても二度と習う気がなく、その代りあちこちの図書館に通っては、音楽理論や音楽史の本などを片っ端から読み漁った（当時東京市内の図書館は、上野の国立も各地の市立も入館料すべて四銭で、どこもガラあきであった）他に、親には内緒でバイオリンの稽古を始めた。別に内緒にしなければならない理由などあるわけでもないが、親の方では、せっかく途中までやったピアノをもう一度始めるようにとうるさく迫っていたからである

さいわい楽器は学校の音楽部にあったし先輩が教えてくれるから授業料も要らなかったのである。中学一年の夏休みになる時に始めて楽器を下げて家に帰り、ホーマンなど弾いてみせたところ、私がひそかにバイオリンなど習っているとは夢にも知らなかった親は魂消たらしい。早速当時の金で弓、ケースとも二十円という中古の楽器を買ってくれた。これは今でも手元にある。ところが、知恵のつき始めた子供が玩具を片端から壊したがるように、私は（バイオリンを壊したりはしなかったが）音楽を片端から分解し始めたのである。つまりこの辺でタコ形音楽マニアの血が騒ぎ始めたのか、バイオリンだけではあきたらず、ビオラ、チェロ、コントラバスはおろか、フルート、クラリネット、オーボエ、ファゴット、ホルン、トロンボーン、トランペットなどなど、およそ音楽部に備えてあった楽器のすべてに触ってみて、音の出し方を研究し、図書館で仕入れた知識を実験してみたのである。「われに教則本と楽器とを貸し与えよ。さらば四週間でこれをマスターして見せん」などと豪語していたのである何故こんなことになったかと言うと、中学生は中学生らしいマーチやワルツ、などということが嫌いで、やはりベートーヴェンやモツァルトを弾いてみたいものだから、楽器があっても演奏者がいないというものを何でも一手に引き受けることになったか

らである。

ここまで病膏肓に入ると次にやりたくなるのは当然棒振りということになる。たまたま先輩のいた東大オーケストラに助っ人に引っぱり出されたのを機会に、その指揮者永井某先生の門を叩くことになった。そんな訳で私の音楽はすべて我流である中で曲りなりにも月謝を払ったことがあるのは前記ピアノと、棒振りと、それにビオラを半年ばかりとだけである。後になって音楽家仲間に少しは顔見知りもできるようになった頃、やはり我流では駄目だと悟って誰彼に入門を申し込んではみても、私の如く我流で悪い癖のしみ込んだ者など誰も面倒を見てくれる筈もなく、「まあそう言わずに友達付合いで行こうや」てなことで、みんな断られてしまうのである。

ここらで身の毛もよだつ話を一つご披露しよう。小生アメリカ留学は美人コンテストでお馴染みのロングビーチだが、どういういきさつでか私が音楽をすることがバレたらしく、ロングビーチ市立交響楽団からトレードばなしが持ち上って、無給ビオラ奏者をつとめることとなった。この楽団にはビオラ奏者が私一人で、練習の時は常に首席兼末席である。ところが演奏会の前日の総練習になると、お年寄りが一人私の隣に座っていとも鮮かに難曲をスラスラと弾くのである。年齢といい、演奏の腕前といい、人品骨柄といい、私よりはるかに上であることは間違いないので、当然私は首席の座を譲ろうとするのに、件のおじいさん曰く「君は首席でおれはエキストラだ。当然君はその場所を動くべきではない。」かくて演奏会の当日も私は首席然として、そのおじいさんに譜めくりさせたのである。あとで聞いたところこの人こそ故トスカニーニ指揮するところのかのNBC交響楽団で永年首席ビオラ奏者を勤めたあと、引退して気候のよいロングビーチで悠々自適の日々を送っている有名な人であった。日本にアマチュア演奏家多しといえども、こんなに偉い人に譜めくりをさせて平然としていたのは多分私をおいてはあるまい。

さて、話はもとにもどる。昔話をするとまるで音楽以外には何も勉強などしなかったように思われるかも知れないが、今と違って戦時中のこと、そんなことで学生生活がつとまるわけはない。学生らしい勉強も人並にはしたのです。いや、自分で言うのは気がひけるが、ある意味ではひとの読まない本なども（音楽以外にも）随分と読み漁りもしたのである。きびしい戦争中のこと、今のように生活のあらゆる面で余裕がなかったことが、かえって幸いした点もあるのだと思う。下宿のあてがい扶持の食事では腹が減ってたまらない時に、バイオリンを弾いて気をまぎらわした事なども今となっては物悲しくも懐しい思い出と言うものである。その戦争は新潟の大学一年の夏で終りとなった。戦後の食料難やインフレは貧乏学生にとっては却って戦時中より辛かったことはご承知の通りだが、気がねなく音楽が出来ること、暗幕やゲートルなしでオーケストラの練習が出来ることは有難かった。新潟には大学オーケストラの他に立派なアマチュア・オーケストラ新潟交響楽団があって、そこでもチェロやらホルンやら、時にはティンパニやら、タコ形マニアの本領発揮の機会が豊富にあった。大学の一年先輩に私と同様、間違って医学生になった小林幹夫というのがいて、信時潔（海ゆかばの作曲者）の高弟と称し、これはもう医学そっちのけで作曲ばかりやっていたが、後に本当に中途退学して今では東京の某音楽大学の教授におさまっているし、新潟県庁に勤めながらビオラを弾いていた佐々木何某氏も今では音楽史の専門家として別の音楽大学教授として有名になっている新潟の回船問屋の若旦那に無類の音楽マニアがいて、同類四、五人が毎週その屋敷に集合しては弦楽四重奏を弾きまくったが、これが実に私にとって音楽開眼ともいうべき貴重な経験であった。音楽はアマチュア

の為にある、音楽の醍醐味は室内楽、それも弦楽四重奏、弦楽四重奏の本質は、などなど、私の音楽観はここで培われたといってもよい。卒業試験の寸前まで大学オーケストラの指揮者を続けていたが、後輩にバトンを渡すにあたってささやかな楽譜や楽書のコレクションもすべて部に寄附してしまったのは、今にして思えば浅はかであった。私はその時は本気で音楽と縁を切って医学に専念する積りだったのである。

さてインターンは札幌でということになり、ここで始めて北海道との縁が始まるのだが、医学に専念どころか、札幌に来てみたらすでに札幌放送管弦楽団の方に私の手配書が回っていて、直ちに、半強制的にそのビオラ奏者ということにされてしまったここで医師国家試験までの一年を勤めたあと、いよいよ指揮者として独立することとはなったのである。当時、北大文武会オーケストラはまだ戦後の復興が遅れていた。音楽気違いの学生が集って学生半分社会人半分のオーケストラを作り、私を指揮者に担ぎ出したのである。北大ソナテ会と称したこのオーケストラは、真駒内米軍キャンプの音楽家達も仲間に入れたりして、一時はかなり派手に活躍したので、「君等のおかげで北大文武会オーケストラが復興出来ないのだ」と故武田教授に小言を言われたりもした。当時の仲間の中にも今は音楽の専門家として活躍している人が何人かいて今や花形の作曲家広瀬量平氏や、札幌で活躍している指揮者佐々木伸浩氏、川越守氏N響コントラバス首席中博之氏なども当時の仲間である。北大文武会オーケストラの後身北大交響楽団が復興するに及んで、ソナテ会は自然消滅となり、しばらく無官の大夫の時代が続く。ソナテ会のもう一人の指揮者、宮崎親史氏に私淑してそのバイオリン教室の助教みたいなことをやったり、たまに仲間が集って室内楽を弾いて楽しんだりする程度で、いわば私の音楽活動の端境期であった。その後札幌医科大学室内楽合奏団が創立され、顧問兼常任指揮者を室蘭に赴任するまで続けていたが、指揮の方は現在は札響のチェリストにバトンを譲り私は顧問ということになっている。私の音楽活動の歴史の中で、なんと言っても最も大きな出来事は、札幌アンサンブル・ラークの創設である。前記宮崎親史氏やその弟子達が集って主としてバロック音楽を中心に弦楽合奏を演奏する団体で、厳重なアマチュア主義を取り、音楽はアマチュアの為にある、弦楽の醍醐味は合奏音楽にある、という私達の主張を実現すべく、いかに人手が欲しくてもプロは入れない、というきまりで今日に至っている。その代りの好きな人なら誰でも仲間に入れるから、今日では宮崎氏の弟子以外にもいろいろな人材が集っている。創立以来十年以上も経つと、メンバーも随分出入があるが、日曜日の午後は、学会でも無い限りこの会の練習の為に捧げられるから、私がゴルフ等で皆さんのお付合いをしないのは、ゴルフが嫌いな訳でも、人付合いが悪い訳でもなく、ひとえにこの会の練習の為であることをご了解載きたいのである。さいわいメンバーは技術的にもある程度以上の水準の人が揃っているから、全国の同種のアマチュア団体の間では札幌にラークありということがある程度は知られているらしい。私自身の趣味のせいもあって、レパートリーは現在ではバロック音楽ばかりでなく、超現代曲にまで手を拡げていて、本邦初演と覚しき曲も度々ステージに上げている。

室蘭音楽協会市民オーケストラが十五年のブランクの末に再編成されたことは皆さんもご承知の通りで、毎週月曜日午後六時以後は私は医者ではなく音楽家である。

人には躁型とうつ型があるというが、私の場合は前者とみえて、只今あい勤めている音楽関係の公職を列記すると、室蘭音楽協会会長、同市民オーケストラ指揮者、札幌アンサンブル・ラーク指揮者、札幌医科大学室内楽合奏団顧問、日本弦楽指導者協

会全国理事、同北海道連合会理事長、などなどということになる。音楽はアマチュアの、万人の為にある、地方音楽文化の振興とは一人の専門家を育てることでは無く、百人の音楽愛好家を育てることにある、という私の信念を実現すべく微力ながら張切っているのであります。こんな大それたことを臆面もなく言うことこそマニーたるゆえんであろうか。冒頭のタコ形音楽馬鹿とはまさしくマニーの別名であると悟った次第である。

マニーを自称するからには音楽一辺倒ではその名に恥じようというもの。波久鳥の前号にも告白した通り、よく言えば好奇心旺盛、悪く言えば浮気っぽい私のことだから、この拙文がお目にとまる頃にはまた全然別の分野の拙著が世に出ていて、皆さんをあきれさせていることであろう。たった一度の人生、やりたい事を人の三倍やればそれだけ長生したことになる。というのが目下の所の私の浮気の自已弁護である。

二羽の小鳥

高橋陽夫

「ジャーヌは馬から降り、木の幹にもたれて、じっと動かずにいたので、二羽の小鳥が彼女の姿を目に入れず、すぐそばの草の中に舞い降りた。その中の一羽がしきりに動き廻り、翼をひろげて震わせながら相手のまわりをぴょんぴょん飛び廻り、頭をひょいひょいさげては囀っていたと思うといきなり二羽が一緒になった。」

（杉　捷夫訳）

これはモーパッサンの名作『女の一生』（Une vie）の第九章の中にある一節である。『女の一生』は一八八三年（明治十六年）二月に新聞に連載され、同年四月に単行本として出版されている。

また、有島武郎の名作『或る女』の第三十四章の中には、次のような条りがある。すなわち「ある天気のいい午後―それは梅の蕾がもう少しづつふくらみかかった午後の事だったが―葉子が縁側に倉地の肩に手をかけて立ち並びながら、うっとりと上気して雀の交るのを見ていた時、玄関に訪れた人の気配がした。」

有島武郎は明治四十四年（一九一一年）一月以降、『或る女』の前篇を雑誌『白樺』に連載し（大正二年三月まで十六回）大正八年（一九一九年）三月に前篇を、同年六月に後篇をそれぞれ叢文閣から出版している。

ここで不思議に思うことは『女の一生』の主人公ジャーヌと『或る女』の主人公葉子が期せずして小鳥の同じ情景を見ていることである。モーパッサンも有島武郎も、小鳥のこうした情景に深い関心をもっていたので（これは憶測ということにしておこう）、その印象的な情景がはからずもそれぞれの小説の中に、自然描写の一駒として描き出されても止むを得ないことだろうしまた、当然のことかも知れないと、おとなしく納得してしまえばそれまでで何もとやかく言うことはなかろう。

しかし、『女の一生』と『或る女』の発表の間には二十八年という長い時の流れがあり、作品の発表はもちろんモーパッサンが先で有島武郎が後である。この間、有島が『女の一生』を原書（仏文）で読んでいるか、英訳で読んでいるかは知る由もない若し英文で読んでいるとすれば、これは有島が明治四十年から大正三年まで八年間、北大の前身東北帝大農科大学で英語の講師をしていることからうなづけないこともないが、フランス語については資料が見当らないのでなんともいえない。

有島は明治三十六年八月渡来、同年九月にペンシルバニヤ州のハーバード大学に入学し、経済・歴史を専攻している。同三十八年九月にはワシントンの国会図書館に通い歴史・文学を耽読している。九三年の米国滞在の後、同三十九年九月一日米国を去

ってヨーロッパ歴訪の旅に上り、同四十年一月ヨーロッパ歴訪最後の地ロンドンに渡る。有島はここでも図書館に通っている。ワシントンとロンドンの図書館に通っている間に、ここで『女の一生』を仏文で読んだか、英文で読んだかはまた知る由もないが、この頃すでに『或る女』の大体の構図が出来ていたのかも知れない。

同年二月帰国の便船因幡丸の船中で「アンナカレーニナ」（一八七三～七六年作）を耽読し感嘆していたという記録がある。この長編小説は『女の一生』より十年程前の作品である。この中にも小鳥の情景が描かれているかどうかは詳しく読んだことがないので保留しておく。

有島は大正六年に「ロダン先生の事」と「再びロダン先生について」を読書新聞に「ミレー礼賛」を新小説にそれぞれ発表している。したがって有島が仏文学とくに、モーパッサンとは全く没交渉だったとは言い切れないのではなかろうか。

さて、小鳥の情景描写について、これが偶然の一致であるとか、一寸参考にしたまでだとか、いや全く独創的のものだとか、あれこれ詮索するのは盲蛇に怖じずのとがめを受けることになるのかも知れない。読者たるものは、作者の言わんとするところを素直に受け入れ、その芸術的作品にひたすら没頭し、ただただ静かにこれを味読鑑賞していればいいのかもしれない。なにはともあれ、なんだかこれは余計なお節介になってしまったようだ。

ゴルフ談議

私のパッティング遍歴（Ⅱ）

久安正道

㈠パットのやさしさ、むづかしさ、面白さ―私のパッティング観

むかしからパットに凝っている人は沢山をりました。パットをいろいろな視点から追求し堀り下げて理論づけをしようと試みているのですが、パットは深く考えればいいというものではないらしく段々と観念的になり、哲学的になり、遂には霊感説から芸術論まで出現したりしてをります。目の前のカップにどうしても入らない無念さが何とか卓越した理論を確立して成功させようというゴルファーの執念というようなものを感じさせられます。

一方、パターヘッドをほんの僅か動かすだけの小手先のみの動作ともいえるパッティングに全く興味を示さない人々も多くおります。パットは入れば正論です。入らなければいかに高尚な、むづかしい理論も何の役にも立たないわけです。理論のないのが正論かも知れません。

私もパッティング論らしいものを述べているわけですが、要旨は「パッティングをやさしく考える」ということなのです。その説明に案外めんどうな論理をこねくり廻している自分にいささか矛盾と抵抗を感じている次第ではあります。

パットを単純に考えるために、もしパットに技術というものがあるとするならば、それを次の三点に要約しようと思います。

Ⓐラインの決定―芝を読む技術

Ⓑ方向性
Ⓒ距離感
―ストロークの技術

この三点はカップインの条件ともいえます。パットに成功したということは、ボールは正しいライン上を転がってⒶⒷ、カップインに適した強さでⒸ、打ち出されたことになるわけです。ロングパット以外、ナイスパットというのはカップインしたものをいうのであって、「惜しい」というのはミスパットと同じことです。間違って入ったということはあり得ないわけで、本人が

ミスパットと思っても入ればそれが正しいのです。入ったからナイスパットであり、打った人が意識するとしないにかかわらず完全なパットが行われたことになるわけです。意識して成功させるようになりたいものです。

もし、「パットはやさしいと思いますかそれともむづかしいですか」と訊ねられたら「短い距離は易しい、しかし、距離が長くなると難しい」と当然の答えをしようと思います。大変な愚問愚答のようですがパットの特異性を衝いてをります。パットが難しいのは距離が長くなったからであって他のスポーツの様に高度な技術を追求したり、又、ハードなトレーニングが要求されるからというのとは大きな違いがあるわけです。距離が長くなれば当然、①ラインの読みが難しくなり、②芝の影響も受けやすく、③フェースの僅かなブレも響いてきますし、それに④心理的な不全が重り合って成功率が悪くなるのです。

しかし、多少難しいラインでも三〇㎝のパットを一〇〇％入れる人が、三四㎝のパットならどうでしょうか、ボール一箇分長くなっただけですから見た目には三〇㎝とほとんど同じですし、これ位の距離の延長では①～④の影響も大したことはなく、多分一〇〇％成功と思われます。実に4㎝長くなっても前回とほぼ同様ですからこれも成功するでしょう。この様に少しづつ距離を延ばしてゆくとどこまでもいきそうですが、そうはならず或る距離から失敗のケースが出てきます。

つまり、打ち方はほとんど同じなのに、距離だけが成否を決める要因であり、しかもやさしさから、むづかしさに移行するのもほんの僅かな距離の差であるという点がパッティングの面白さであると思います。

或る距離以内ならば自信をもって1パットでカップイン出来るという距離が誰にでもあると思います。この或る距離を便宜上「確信距離」と名づけます。（私の造語ですがその人の、OKボールゾーンとでもいうもので多少面倒なラインでも一見して成功可能と思われ、事実ほぼ一〇〇％カップインし得る距離のことです）。確信距離は人により勿論違います。三〇㎝の人も、或いは五〇㎝・1mの人もをりますが練習により この距離を延ばすことが出来ます。確信距離を延長させることが練習の目標であるといっても過言ではないと思っています。

自分の確信距離を把握していた方が有利です。第一に絶対の自信を持てますし、アプローチもその範囲内に狙いをつければいいし、パットも確信距離分オーバー目に打つ事も可能というわけです。

練習のとき一つだけ条件があります。それは常に一定の球を打つこと、つまり自分のパッティングフォームを確立することです（実はこれがパットの最重要な基本であると思います。練習の項で後述します）

㈡パットの神様―理想のパッティング

ウイリーパーク・ジュニアという人がスコットランドにいました。全英オープンに数回優勝した名ゴルファーですが「パットの神様」ともいわれてをります。パット術のバイブルとして今日でもイギリスで愛読する人が多いといわれている「The Art of Putting」という本を書いてをります。彼はパットの練習を一日四時間以上、時には八時間毎日数年間にわたって行ったと伝えられてをります。その結果パットに最も重要な微妙なタッチを感得し、「6フィート以内は絶対確実に成功させ得る」と公言したと云われてをります。

私は数年前にこの話を聞いて、次の様な興味と疑問を感じたのを覚えています。

(1)先ず彼のパッティングスタイルです。勿論写真でも見たことはありませんが、これだけの練習に耐えるには多分、自然体といいますか、非常に楽な無理のない、いいフォームだったと想像できます。

(2)疑問といいますか、奇異に感じたのは6フィートという距離です。2m弱ならば

私でも時には入りますし、上手な人なら軽く成功すると思われる長さなのに「神様が公言した」と驚きをもって云われる程の距離かどうかということです。でも近頃よく考えてみますと一八〇㎝1パット、私流にいえば確信距離6フィートということがどんなに素晴しいことかよく解ってきました。アプローチは直径約4mの円内を狙えるし3パットは先ず無いし、実に決して確信距離外はすべて2パットというのではなく、ただ1パットの確率が減るということですから、誠に美しい限りだと思います。

(3)しかし、私の確信距離を假に四〇㎝として神様との差が一四〇㎝です。この一四〇㎝は神様が延数千時間の練習により獲得した距離ということになります。この様に考えますとパッティングとは、やはり大変むづかしいものであるということを改めて思い知らされました。

(4)神様の確信距離が6フィートということは、私達が自分のパットの好・不調を自己判断する重要な基準となります。印象に残る2、3のパットで調子の好し悪しを決めて了うミスを犯しやすいものです。例えば2mのバーディパットと一・五mのパーパットを2本も外したからパットが悪い、又5mと4mのパットが入ったから調子がいいと思ったりします。しかしながら2m前後のパットがそんなにポンポン入るわけがないのです。当然失敗することもあり得ることなのです。（神様でさえ確信距離が一八四㎝なのですから）。

1m前後のパットがほぼ確実に決っている日は決して不調でないと断定していいと思います。

(5)延数千時間も彼は何を練習したのだろうかという興味も湧いてきます。他のスポーツならプロの選手はハードな練習をするのは当然のことでその内容について特に知りたいと思いませんが、パットとなると一寸違ってきます。足腰・筋力のトレーニングとか瞬間的な判断力という様な一般的な全身の運動と全く異質なものだからです。彼は例えばグリーンに色々なアンジュレーションをつけたり、極端に速い、又は遅いグリーンを造ったり、正規の4インチ¾より小さい3インチ½のものを使って練習したと伝えられています。彼が何を目標にし追い求めた理想とは何であったかということは判りません。

どうもパットの練習とは理想のパッティング術を求めるのではなく自分のパッティングを完成させ、自分の距離（確信距離）を如何に長く延長させるかということにあると思います。

(三)120㎝のパットーパッティングの確率

あるプロのトーナメントで三mの距離のパットの成功率は三本に一本、つまり三三%強であったといわれます。一m～一・五mではどうでしょうか、多分失敗するのは一〇%以下と思われますが、成功率が一〇〇%でない限り常に失敗の可能性があるというわけです。先日テレビのゴルフ中継を見ていましたら、一・二mのパットをめぐって劇的といいますかショートパットの怖しさをまざまざと印象づけられた逆転劇がありました。

八三年五月十五日、東京よみうりカントリークラブでワールド・レディースゴルフトーナメント最終日、一八番ショートホールこのホールは一八五m、やや打ち降しながらバンカーにガードされた砲台型の名物難ホールで、当日最終組前までワンオン四二名中一三名、バーディは前日に一名だけでした。それまでのゲーム展開はアメリカの新鋭パテー・シーハン（一九八〇年プロ入り、八一年新人王、二六才、四勝）が初日二日目と首位を走りこの日も一七番までマイナス四。同じ組に昨年日本で大活躍し日本の外貨流出に大きく貢献した台湾の涂阿玉がマイナス三。既に二組前に終了した池渕富子（一九七六年プロ入り、優勝経験なし）がマイナス三で最終組を見守っています。池渕はこの日イーブンでスタート、一

七番まで八バーディ四ボギー、マイナス四で一八番に向いましたが第一打を左バンカーに入れ、そこからピン四mのところにオン、第一パットを六〇cmオーバー、結局ボギーとしてをります。この時点でP・シーハンがマイナス四で逃げきるか、二人又は三人でプレーオフか、涂のバーディで逆転かなどいろいろなケースが考えられましたさて最終組一八番ホール、P・シーハンのティーショットは手前バンカー、次の涂も右バンカーに入れて了いました。P・シーハンの第二打はピン上四m、第一パットは一・二mオーバー、涂はピン左一・二mに乗せているので、いよいよマイナス三で三者のプレーオフを思わせました。ところが二人とも、よもやと思われたこのショートパットを外して、池渕富子に初優勝と賞金四〇〇万円が転り込んだという見ている者にとって大変面白い一戦でした。

「どうして二人ともこんなパットを外したんでしょう」と実況のアナウンサーに訊かれては、解説者も返答に困ったことでしょう。もしウイリー・パークが解説者なら「6フィート・一〇〇%に近づく様に練習することです」という答えが返ってくると思います。

（続く）

かなり古いお話（その三）

小雲水

マストに旗をたてて静かに機帆船が走りびっくりする様な大きな汽船がゆっくり出入りした入江の海も何時の間にか埋立てられて、室蘭社会保険、室蘭開発建設部、船員会館、運送会社等入居のビル、九月に開館する新しいホテル等々が次々建てられ、お日様もお月様もこれ等の屋根から登る様になり浜は美しい白亜の立派な都になって来た。

昔、小樽と同じ様に木造であった石炭桟橋は戦争になる前後から鉄筋コンクリートの雄大なものに代って、茶津町と入江町を分ける象山（私の陋屋からは象が海に向って寝ている様に見えるので仮につけた呼称）の裾を長く海に伸ばしていたが、これも石炭と海を失って去年と今年で姿を消したその感懐をパイスケと石炭の人々の総大将だった八十三翁が、昨夏NHKテレビでとつとつと緑蔭で語っていたのが印象的であったが―。

九日ぶりでやっと晴れた残暑の日、T大学芸術工学部建築学科と長い肩書の先生の紹介状を持って建築史の勉強をしている学生二人が玄関に立った。古い家を求めて町を歩いて来たとの事、請われるままに招じ入れて、設計図を示し広くもない家を隅々まで案内した。学生達はこの古い家の内外を写真にも撮りつづけた。

丁度その時、我が家より未だ古い室蘭屈指のしっかりした旧家がその長い間の役目を終えて、解体中であった。「もう少し早ければ」と学生君に伝えて、だんだん失くなって行くお隣りの家を惜しんだ。

今の私の家に移って来た頃、その旧家の先代翁は越後の方ですでに他界されていて私はお目にかかった事はないが、老夫人はお元気だったので当主御夫妻やその御子様方には私共一家は室蘭転居前後から種々数え切れぬお世話になって現在に及んでいるその老夫人も逝かれてもう二十年を越えている。色白で上品な物腰に温顔で、よく世間話や古い室蘭のお話をして戴いた。

奥に長い二階建の家で、表は広い土間を持ったお店で帳場があり、向って左側につづいて茶の間、炉が切ってあり天井から自在鍵が大きな鉄瓶を吊っていた。居室、客間はずっと奥、向って左側には土間が長く奥へつづいていてかなり高い石垣で下の海

岸町と同じ平面になっていた。そこが庭で欅の大木が亭亭と聳え立ち、その側に春には遠目で桜の花の様な模様の海棠がさわやかに美しく咲いた。この欅は、下の海岸町から石垣の上の母屋の屋根を越えて隣りの我が家の屋根の中位の高さで二十米位、三本立になっているが二抱え位の太さ、遠近を抜けば例の象山と同じ位に見え雄大で立派である。老夫人がお嫁に来られて間もなく植えられたと聴いたのでもう少しで百年になる。幹がどっしり太く、根や枝を四方に張って栄え、春夏秋冬四季折々の風情がある。

晩秋には木枯が吹いて黄金の落葉吹雪となり、黒い木におだやかなふんわり白い綿帽子を冠ったり、厳寒の吹雪に叩きつけられ荒々しい氷雪をまとったり、やがて春、新芽から若葉、今は夏も過ぎ残暑、濃緑で木の勢も絶頂にある。家鳩、鷗、鴉、雀等このあたりに住みついたおなじみの鳥達の他、日頃見かけない美しい大小の小鳥達が次々と静かにこの大木の緑を頼って訪れ、安心して夫々美しい鳴声を上げている。鴉夫婦は枯木や今流のビニール袋や紐、我が家の藤棚の綜紐縄等をもぎ取って今年も巣作りをしたものである。

建物の表は格子戸や窓、くぐり戸がついている。その上には部厚い大きな素材に墨痕鮮やかに屋号と商店名を銘してあり、その少し上には別に金文字で浮き出した主と商店の名があったが、これは殆んど外側の看板に遮られた形になっていて、何れもひっそりと静かで店に発着する貨物車や運搬の人々にも分らないようであった。さりげない佇まいであってこの家の人々の人柄を偲ばせている。

港町、坂道、どの家も裏で背中合せをしていて狭い小路でつながり合い然も奥行が長く、表はかなり広い路である。この旧家の上隣りが私の陋屋、小路を狭んでこれも旧家の商店があった。敗戦の混乱、物資欠乏の一時期から次第にアメ玉から小間物、混紡の衣類等も少し出廻る様になった頃、今は笑話といってもよいが、或る夜ミシミシと異様な音がして一人の男がお隣りに抜き足差し足で何処からか忍び込んだ。老夫人（お婆さん）は目ざとく気付き一緒のお孫さんを起して物かげでその鼠の動向を見張っていたら、お婆さん達の前をコソコソ通り何処へともなく消えた。つづいて小路を通り私の家へ。人気のない部屋を荒して路を隔てた上隣りで又衣料品、売物の反物、大物、小物をかき集め、お隣りのリヤカーに三軒で集めた戦利品を積んで雲は霞と消え去った事もある。

この三軒で目が覚めたのはお婆さんただ一人であった。翌日この事を報らされ、はじめて、そう云へば何かゴトゴト音がした様にも思われ、又ああああれが無くなっていると気が付いた。この様な出来事がチョコチョコあった。それぞれ路地の奥は深かったが比較的真直で大きな鼠の通行には便利さもあったようだ。このお隣りの旧家は伊達市に酒譲造場があり、お味噌、お醤油、ビール他を扱う大きな老舗である。当主は二年前文化センターの近くに立派な邸宅を築き移転された。

こうして明治、大正、昭和三代に連なった旧家の建物は失われて行く。お向いの俳人、稲月蛍介宗匠とその有様を眺め乍ら惜別の情を言葉少なに話し合った事である。

室蘭「ザノサ」

作詞　小國　親久
　　竹内　隆一

漂泊（さすらい）の日　情熱の詩人〝啄木〟が
内浦の海を…白鳥の入江を詠（うた）えり
という…そは風説なりや
昭和の御代も五十有八年を経たる
新春のある宵　旗亭〝常盤〟にて
ガマ人（ひと）・親人（ちかひと）などの男の子　酔余

—大正っ子物語—

進駐軍余波

加藤治良

DDTとSTEW

Pediculus humanus（ヒトジラミ）—庶民の人肌と共に生きつづけてきた此の微小昆虫は、〈かんのんさま〉と呼んでくれる人たちも居て、飼主にとってはわが汗、体臭のごとく分身的ないとおしさを覚えるものらしい。

とはいえ、戦時から敗戦後の数年間、不潔列島、飢餓列島に落ちこんだ大和島根とは裏腹に繁栄を誇り、あまつさえ死亡率五〇%の発疹チフス仲介人ともなると話は別だ。

森波のばあちゃん、佐和山のぢいさんの外来日は殊にたいへんだった。汗っかきで体重以上に着ぶくれて、寒のゆるみと共に両人の発散する独特の香料の匂も強くなる人一倍きれい好きな主任看護婦、小倉君の眉間に癇筋が浮き上って

「ばあちゃん、着物そんなパタパタしないでネ」

やさしくは言っているが、

「次のクランケ、ちょっと待ってもらって…。島本さん、ホーキとチリトリっ」

窓を一杯開ける。ストーブに投げこまれたばあちゃんのPediculusとその卵がはぜる。

佐和山じいさんはいま少し念入りだ。血圧を測定するだけだから腕を出すだけでいいの、と言うのに、よれよれ軍袴の紐を解いて毛糸とメリヤスのズボン下二枚まで押し下げてしまう。

はらはら眺めている己たちにはお構いなし、立上って、癖なのだろう—トントンと二、三回足踏みをしてから軍袴をずり上げるのだ。

長男は戦死、次男は復員早々に家を飛び出して、婆さんと二人暮しの何とも気の毒な佐和山さんではあるのだ。

dichloro—diphenyl—trichloroethaneなる白い粉末が進駐軍から放出配給されてからPediculus禍は一掃された。スイスのミュラーが医学生理学ノーベル賞をもらった程だから、ハエ・カ・シラミに対するDDTの効果は絵に描いたように判然としていた。

「どれどれ、インブ、コウモンの類にもかけるかな」

診療を終えられた津毛先生が、これ亦、興到り　遙かに〝啄木〟を偲びて
詞せるは　室蘭「サノサ」…

一、室蘭の　入江に立ちて　待人が
〝内浦の　懐深き　大黒の
島の灯りを　船は目指すか〟
情熱秘めたるネエー　情熱を
現今も　港の　道標

二、白鳥の　岬遙かに　詩人が
〝絵軒なる　電信浜に　佇めば
風逆巻きて　渦潮流るる〟
漂泊詩人のネエー　感慨を
現今に　残すや　語草

三、測量の　山より望む　対岸に
〝有珠岳の　赤き昭和の　岩肌に
神秘を　湛ゆる　洞爺の湖か〟
天地神のネエー　神歌が
永久に　伝わる　史の跡

四、室蘭の　山坂道に　思うのは
〝ボウ、ボウーと　遙かに響く
船の霧笛
沈黙破りて　息吹き　あるかな〟
胸底に　秘めたるネエー　情熱を
将来に　伝えん　心意気

陸式乗馬ズボンの間に円筒をさし入れて、ぷっぷっと吹きかける。営内靴の音高く外来を出て行かれた後で

「それではオレも…」

看護婦だというのに、純情な娘たちは、インブ、コウモンと聞いただけで顔を赤らめ待合室へ駈けこんでしまうのだ。

◇　◇

「五十八号室の磯神さん、退院したいって言ってます」

磯神さんは三十六歳、三度目の喀血がおさまって二週間になる。十と六ツの男の子が二人、奥さんは妹に半分手伝ってもらい病室と家庭を往来していた。受持ちの桑山看護婦に病人自身がボソッと訴えたというのが昨日のこと。

「磯神さん、退院したいって、どういう事？だいぶ顔色も良くなったのに…無茶だなあ」

青い表情で黙っている。

「何か、特別な事情でもあったの？」黙っている。

「奥さんが見えたら医局に連絡してくれないかな」

—先生、どうにもならないんです—

独語りの口調で

—まともな食べ物はみんな私の処へ運んで来るわけでしょう。子供達はとも角、女房のやつ、ろくなもの喰べてないんです。金だって、すっからかんだし…一家飢え死ですよ、いづれ—

己の顔をじっと見る。磯神さんは洋服の仕立屋さんだ。同種の悩みを抱えて他にも何人か居た。飢餓列島の牙は非情である。

退院したら、一家中なおのこと悲惨になるだけだよ…声にならない言葉で己は、その眼に語りかけるだけだ。

◇　◇

初夏が訪れて、その日、昼近くの廻診で二階の廊下にまでなんとも魅力的な匂が漂って来た。思わず、おっ、と声が出る。

「今日からですって、進駐軍からの」

桑山がすかさず応える。

大部屋、三号室の廊下には、山田さんも高橋さんも下川さんも銘々アルミ食器をかかえて並んでいた。事務の尾藤氏が緑色の大きな缶から掬っては分配している。

シチューだ。

—やあ、美味しそうだね—

と言ったら、山田さんと高橋さんは照れた顔付きをした。下川さんの奥さんは、助かります、と素直に笑っていた。

元防衛司令官、厚井少将閣下の売店で、己はコロッケを三ケ買った。廊下の角で一坪余り、こぢんまりした武家商法だ。

「コロッケお好きですね」

おだやかな閣下夫人は静かにほほ笑む。医局食堂は賑やかだ。

「ああいうまいもの喰べながら戦争するんだから、ああた勝つのも当然ですな」

「とも角、院長さん、クランケは喜んでいますよ。寄宿舎の娘たちだって」

頑固だが人情家の五ツ木眼科。

「何時まで続けてくれますかね」

副院長の片山さんは心配げな面持ち。

「ボクは味見もしません。盗泉の水は飲まずです—いや盗泉の水はおかしいな。敵の施しかな」

神山医員だ。

「そんな料簡のせまい事では困りますな割り切ることです。敗戦ですから、現実は厳しいですよ、ああた」

と、院長がたしなめる。

—少将閣下の心境は複雑でしょうね—

コロッケを味いながら己が言うのに反応はない。それぞれ軍歴を持っている筈なのに…。閣下ともなれば雲の上、ちょっと見当もつかないのだろう、と合点して己は昨日、事務室で見せられた法務庁リストの文字を思い出していた。〈元海軍軍医にして軍国的色彩濃厚なる者〉

LADY Dr. と MAID

「おいおい、見たか？進駐軍の女医、二

世だそうだ」
内科医局に入って来るなり、神山耳鼻科の大声だ。
いや、まだ見ていない、どんなヒト？東郡先生は見た？峯坂先生は？
内科の若手は誰も未だ拝見していない。
「神山、お前見たのか」
平岡さんと彼とは中学同期で己の二期先輩だ。
「ウン、院長室から出て来たところをナネッカチーフなんか被ってよ、ちょっとしたもんだ。二十五、六かな」
翌日、午後の外来がひとくぎりついた処に、小西なんとかの彼女がヒラリと現れた本当だ、青いネッカチーフ、真赤な口紅、ゴールド地に赤と黄の大きな文様のワンピース、薄青の色眼鏡で、ヒラリと現れ、パッと咲いた。
横に坐られて、小倉の頬が上気する。己だって同じだ。一服、火をつけて落着こうと思ったが、吸いさしの煙草しか無いのに気づいて止めにした。
「ニューマネ、どれ位かしら？」
新円のことか、どれ位って何の事だ。考えている途中でスーッと立上って、隣の処置室に入って行く。
「これ、何かしら」
おい、小倉。先生、行って。仕方ない。
—肺活量計ですが……—
「聖ロカのとは違うわね」
そうかな、世界中似たりよったりじゃないのかな。
「お邪魔さま」　ひらりと出て行った。
内科医局は独身医の溜り場だったから、小西なる二世女医の話がない日はなかった燻った院内を刺戟的な色彩で歩き廻られてみれば無理もない。
五日程経って、揚葉蝶が消えた。
「おい、彼女はプレだとよ。女医なんかじゃないんだ」
神山耳鼻科の報告だ。
「マイヤー中尉のオンリーだそうだ」
「はっはっは、やられましたね」
東郡医員が愉快そうだ。
マイヤー中尉は正真のドクターだ。羽田さんの頚部腫瘤を試みに診てもらったところ、即座に、ホヂキン氏病なり、と断定して…流石ですな、これからはアメリカ医学の時代ですな…と阿木院長を三嘆せしめたそのマイヤー中尉である。
「彼女の話かい」
永島医長が入ってこられてニヤリと笑う
「オンリーかどうかは判らないけど、若い人達は駄目だね。女医さんかどうか、直ぐ診断つきそうなものなのに」
新円の話を持ち出したら
「それはプノイモニイの英語読みじゃないの？」
sog. Lady Doctor の出現は寄宿舎の娘たちの化粧に影響を与えたようだ。色眼鏡まではゆかなかったが、ネッカチーフ、ドーラン、濃いルージュが二人三人と目につきはじめたからだ。

◇　◇

夏が来る。
ちぢれ髪を赤く染めて、あれは姉妹のパンパンだそうだ、と噂される二人娘が廊下の真ん中を平然と歩いたり、似た風態でGIの腕にぶら下る娘も現れたりで、色彩が少しづつ街角に戻って来る。
「キャンプのメイドさんたちの胸部検診をやる事になったからね。かとう君頼むよ若い娘さん、七人だよ。毎月一回、透視でいいそうだから」
永島医長は、いい仕事だろう、とつけ加えてヒゲ面をなぜた。
—透視ですか—
嬉しくない事はないが、皮膚科の利根先生の奇禍以来透視は敬遠気味なのだ。
管球も配線も裸むき出しの装置だった。赴任早々の利根先生の背中を電流がつき抜け見事に穴が開いた。強運の先生は生返ったが、しばらくは、傍によると焦臭い匂がプーンと漂ったものだ。

透視室の壁に行儀よく並んでもらって、動くんじゃないよ、と念を押して一人づつはい次ぎ、はい次ぎ、もう終りだ。

メイドの中で気になる一人が居た。やや大柄だがスタイルが良く、程々にコケットリーでローレンバコールの髪型をしている白衣のポケットにラッキーストライクをそっと入れてくれたりする彼女が、思いがけなく、千歳町マーケットの焼鳥屋の樽椅子に坐っていた。

「あら、先生もこんな処にいらっしゃるの？」

「こんな処は挨拶だね。お客なんてもんじゃねえや、ネェ先生」

苦笑いした親爺が目くばせした様子で、彼女の横に若いGIがいた—なあんだ。

「マック、シリツビョウインのドクターヨ」

愛想よく手を差出したGI君は相当酔いが廻っているようだった。皿の上にスズメが一匹脚をひらいてころがっている。

「先生、わたし、マックに結婚申込まれているの。キャルホーニアで農園やってるんですって」

あぶないもんだナ、と親爺さんが言う。

「アブナイ、アブナイ、おーアブナイ」

GIマックの笑顔は桃色で、癤だがなかなかのハンサムだ。ちいさな声で二人は何やら話していたが、突然マックが立上って明らかに不機嫌、ねぢけた声の調子で

「カエリマス。サチコ、アナタハココニイナサイ」

親爺がやたら団扇を叩きはじめた。

「マック！」

彼女の声が追いかけて、出て行った。

—どんなもんかねえ—

「わかんねえね、ここんとこ二、三度来ているんだがね。でも先生、ちょっといい娘だナ、毛唐好みのサ」

毛唐好みか、そう言われればそうだ。親爺の空コップを満してやる。そろそろ常連が集って来る刻限だった。

PISTOLとPENICILLIN

皮膚科前の廊下に娘が五人、立ったり座ったりしていた。

階段を降りてきた己を見るや、口々に訴えはじめる。そば屋のねえちゃんの感じで皆二十歳前後かな。二人はペソをかいていた。

「パンパンじゃあるまいし、こんな話ってある？」

「いきなりジープに乗れって言うんだもの、何の事だかわかんないっしょうやネェ」

一番年嵩らしい子に尋ねてみても、その通りだと言う。—通りすがりなの？—

「そりゃあ店だけどさ、普通の店だもの」

—どこ？—

「ワニシ」

事務室に恰幅のよい四十がらみと思える…アーサーなんとかによく似た軍服が仁王立ちになっていた。事務当直の福本さんが大分距離をとって向い合っている。

「ユーガドクターナルカ」

「その通り」

「シカラバ　アノガールタチノ　ビョウキノウムヲ　シラベテモライタイ」

「余はその方の医者ではないから出来ない」

「ナニ　ユーハコトワルノカ」

「断わるのではない、不可能なのだ」

「コトワルトハナニゴトカ」

どうも肝心のところが通じないのだ。

「日を改め、しかるべき専門医によって検査を受けるのが筋であると愚考する」

「コトワルコトハ　ユルサナイ」

わからないオッさんだな。

だが次の瞬間、己の全血量は足の先からスーッと抜け出てしまった。

彼は右手で拳銃を抜き出すや、事務机の上にガシンと音を立てて置いたのだ。生れてはじめての体験だ。まさか撃つ筈はないと気を取り直したものの、脳細胞がちぢか

んでしまった。
「利根先生に連絡しましょうか」
遠くの方から福田さんのカスレ声がきこえた。おお、そうだ、神様。
「その方の専門医に来てもらう故、しばらく待ってもらいたい」
「オーケー、ハヤクシロ」
くそったれめ。
秋の夜の九時前だ。どうかな。幸運にも在宅だった。山一つくり抜いた隧道を通って、常盤病舎から御苦労様の利根先生に手短かに仔細を話す。
「あっそう、はい、はい」そして
「あんた達、みんな入んなさい」
五分と経たないうちに皮膚科の扉が開いて明るい表情で娘たちは出て来た。
「すべて良しである」
「オッケー、サンキュー」
いとも簡単に納得したサージャンは吾々に〝グッドラック〟と言ってジープに乗りこんだ。娘たちも結構さえずっている。
—利根先生、どんなあんばいでした?—
「いやあ、診ない、診れない、診ていない。それでいいんでしょう」
美事だと思った。
ガソリン臭を残して、玄関先は明るかった。十三夜の月がモトマリの空の上で動くともなくゆれていた。

◇　◇

昭和二十六年二月、本院が炎上した。開業のため辞められた近藤先生の後を承けて六月、己は分院に移った。
看護婦三人、薬局一人、事務一人、小使の婆さん一人の小世帯ながら、一国一城の主として、遊びと仕事と二つの図面を描いて己は胸をふくらませた。
明後日は日曜日、テニスコートの都合はどうかな?中学校に電話を入れるべく診察室を出た途端、廊下のベルが鳴った。
「ペニシリンの注射ですか、いいですよ」
近くの油槽所にあるキャンプからだ。
通訳の三村氏は中学の先輩、よく知っている。GIの一人がトリッペル。ペニシリン持参で参上すると云うわけである。
二十才をいくつも出ていないと思われる若いGIが三村氏と連れ立って現れた。股間を指さし、顔をしかめ、両手を大きく拡げて肩をすくめる。
油性Pは吸い上げに少々時間を要する。彼は心得た様子でベッドに腹這いになり、赤毛の生えた尻を突出している。プレの高山君は事務室に引っこんだままだ。
「さあ、いいですか」
指で押す。
「オー、イタイネ」
哀願するような青い眼を己に向ける
「おーう」
すごい聲だ。なんという意気地無しだ。ズボンを穿き終え、歩き出そうとした彼はおや?そのまま、へたへたと坐りこむ様に倒れた。
つい立ての上から三村氏の顔が
「痛みのショックですかね」
ショック!!はっと思った。つい最近の雑誌で読んだばかりのペニシリン・ショックの報告…どこかの教室での三十六例。
大声で高山君を呼んで、ビタカンだナンだと夢中で動き回っているうち、瞼が開いて、意識がもどって、立ち上って、十分も経つと
「サンキューベリ、ドクター」
蘇生したのは己の方だ。
帰りしなに三村氏は
「様子次第で、あとは札幌にやります。いづれ司令部から問い合せがあるかも知れないけど…」
勝手にしやがれだ。しかし、あれがペニシリンショックというやつか、改めて冷汗が吹き上って来た。
ベッドシーツの真中あたりが薄黄色の液体で手掌大に染っている。そういえばあの兵隊さん、パンツを穿いていなかったっけ
どうでもいいけど、そろそろ引揚げてくれないかな、進駐さん。

親交会旅行記

台湾 57・11・20—23
洞爺 58・7・16—17

大岩昌生

□台湾旅行計画の顛末

五十六年旭川旅行の帰りのバスの中で、来年は発会三十周年に当りますので記念事業として少し長い日程を企画したいと申しましたら、色々な希望が出て参りました。十二月に全員のアンケートを集めました所海外旅行の要望が思ったより多くて特に台湾が圧倒的でした。経験者に聞きますと成る程観光天国のようで魅力がありそうです

目的地を台湾にしぼって十月実施をめどに旅行社に相談しました所、遅くとも半年前に契約をしないと色々不利な面があると聞かされ、年開け早々急遽参加募集をする事に致しました。私の考えでは、一〇七名の会員のうち約四分之一以上の参加がなければ記念事業としても又親睦の意味でも物足りないが、先ず二十五名の応募は一寸無理だろう。そうすれば本州の手近な所でも計画しようかと思っていました。所がどうしてどうして募集結果は四十名になんなんとする大部隊になってしまいました。（最終的には三十三名）。私も驚きましたが会長もびっくり。そんな大勢が四日間も土地をあけるとなると地域医療に支障を来たすのではないかと言う心配が出て来ました。間近かになってから三病院とか残留の先生方に不側の事態が起きたら援助を請うよう御願い状を出そうかと会長に相談しましたら、それは大げさになるからやめた方がよい。責任上私が残ると言い出しました。私は会長が行ってくれなければ現地で幹事の一存で決められない事が起きた時困るなあと思いましたが会長の決心は固かった。ともかく参加の先生には連絡事項がある度に第五報迄お配りして、留守中の心配のないよう心掛けて下さるようお願い致しました

最初、十月の連休をはさんだ日程を予定しましたが、台湾では丁度国慶節（建国記念日）と言う年最大の祝日に当っていて海外の所謂華僑が大挙して帰国するので、そのお大尽振りには現地観光業者が我々なんか問題にしないだろうと言う事を聞いて、十一月の飛び石連休に変更致しました。

出発が近かづいた十一月十二日に参加者の集いを催しました所、殆んど全員が集りまして現地の映画、旅行社の説明、質問などで最終的なつめを行い、遺漏のないよう万全の策を練りました。飛行機は最初全滅の危険を避けて二系統にしようかと考えたのですが、便数が意外に少くて時間的ずれが大きく、結局全員同一機になりました。

往路は、千歳―大阪―台北、復路は、台北―大阪―羽田―千歳と五回の離着陸があり接続が万全に行かなければ予定の二十三日中には帰って来られないと言う大変困難なスケジュールになってしまいました。しかし結果は幸にも何の支障もなく全員予定の通り帰って来られたのは天佑と思っています。

十一月初め、雑誌三号の発刊にあたり例年の通り関係各方面に配布しまして新聞社にも送ったのですが、早速会長の所に取材に来て巻頭の言葉に海外旅行の話が載っているが何処に行くのかと聞かれ、発会三十周年記念事業として台湾に医療視察団を派遣すると談話したものが北海道新聞の記事になりまして皆さんご覧になった事と思います。会長の考えが私共に伝わっていなかったので俄かに予定を立てる事になり、視察団長には東栄先生をお願いしました。手づるを求めて台湾大学医学院（医学部）と台北市医師会への連絡の方途を確めました。スケジュールがびっしりの中で台北医師会との懇談は実現出来ませんでしたが、医学部の方は見学を申し入れ、約一時間にわたり構内視察をする事が出来ました。又医療事情についても出来るだけ注目し、現状を見聞して或る程度の知識を広めて来た積りです。人口当り医師数は日本と同程度のようですが、やはり都会指向が強く、健康保険制度、福祉行政も十分ではないようで、庶民は恵まれているとは言えないようです。

以上のように私は少し気を配ばり過ぎて大岩は心配性の男であると烙印を捺されましたが、今回の旅行は皆さんの協力で成功であったと思っています。

□狩野正直大人のこと

台湾の旅行案内書を見ますと、市内のあちこちに屋台の一品料理があって大変おいしいと書いてあります。なる程屋台はメインストリートにも有りましたし、一寸裏通りや横丁に入りますとずっと並んでいます衛生上の事を考えなければ大変食慾をそそりますが今回は見て廻るだけにしました。

夜の観光のバスに乗り込みましたが、出発迄に時間があり、窓から眺めていますとすぐ前に屋台が出て居りました。降りて行って前に立ちますと、おやじが釜の蓋を取って見せて呉れました。豚の腸と麺を煮込んだものだそうです。湯気が立ってお美味しそうな香りがして来ましたが、おやじの皺々の手を見て一寸食べる気になりませんでした。

狩野先生が降りて来ました。彼は満洲に居た事があり、此のような物はお得意らしく、早速注文して食べました。之を見て居たガイド嬢が降りて来て、此の人日本のお医者さんですと告げて居る。日本人がこう言う物を食べて呉れると向うの人は皆んな喜んでくれるのだ相です。ガイド嬢が半額にまけさせて、更にしゃもじでもう一杯どんぶりに注ぎ足した。皆んなニコニコ。私も勇気を出して食べて見ればよかった。

旅行中一寸した苦労がありました。登別の蔡先生から台北市の家族へと旅行カバン一ぱいの荷物をあづかりました。日本語は殆んど話せないと言うので現地のエイジェントに頼んで電話をしてもらったのですが、留守らしくて何度かけても連絡がつきませんでした。とうとう帰る前日の夜になってしまい困りました。思い切って私の室から掛けてみますと今度はうまく通じたのですが、やはり日本語ではさっぱりで、英語なら少し出来ると言うのです。私のあやしげな英語も少しは通じるのですが、ホテルの名前がどうしても判ってくれない。同室の狩野先生が「俺は昔満洲に居たんだが、何しろもう三十年前の事で、どうかな」と言う。そりゃ助かる。是非頼むと出てもらったら何んと通じる通じる。立派に了解となりました。

夜の九時過ぎ私の部屋にやって来たのは

先生の娘さんとその夫と孫達、娘さんと夫の兄弟親戚、そして友人と称する人達がぞろぞろと連なって来たのにはびっくりしました。これから街を案内すると言いますが私達は明朝早くに出立しなければならないのでと、ホテルの食堂で会合しました。勿論私は身振り手振りですが、狩野先生の中国語は通訳の全く要らない程で、これには本人が先ずびっくり、そして大喜びで一時間近く快談し、お土産をもらったりで私にとって大変な思い出になりました。訪問客には眷属一統で歓待するのが礼儀らしいです。

□ショッピング

台湾の商店の熱烈サービス振りには驚いた。観光みやげ店などに入ると、途端に店員がくっついて来て先ずお茶を飲みなさいとくる。店を出る迄マンツーマンの付きっきりで、手を変え品を変え売り込みに必死である。我々全員ぞろぞろ入って行ってもマンツーマン（ウーマン?）。まさに人海戦術で其のしつこい事、饅頭にたかる蝿のようなもんで、不要不要（プョプョ）と追っぱらっても絶対あきらめない。何も買わないで出ると罵声でも浴せられるのではないかと気持ち悪くなったが、決してそうではなく、戸口まで送って来て誠に丁寧なのである。あちらでは、こう言うのがお客様に対するエチケットなのだ相だが、私達には商魂たくましい押しつけとしかうつらなかった。定価販売は殆んど無く、値段は総て店と客とのかけ引きで決まるのである。先ず半額までは常識らしく、それからが客の腕によると言う訳だ。

又土産店の前にバスが停った。私は店内を一巡してサッとバスに乗り込んで眺めて居ると、本庄先生が店員につかまっているのが見えた。例のポーズで胸を張り口をへの字に結んで、店員嬢を振り切ろうとしているが、出口近くになってから遂に値ぶみが始まったようで、私はここで勝負あったと見た。案の定何か買わされて、やられたやられたと買い物袋をぶら下げて乗り込んで来た。

烏来の観光に行った時、かなりの高地なのに気温は三十度近く、直射日光が照りつけて禿頭が熱くてたまらない。丁度土産店の店先に菅編みの帽子を見つけて値を聞くと、一五〇元だと言う。（一元が日本円で七円）。高いと言うと一二〇元までまけたさらにねばって一〇〇元迄来た時、我々の一行が長い橋を渡って向う側で私を待って居るのが見えた。あせったがこれ以上値切るのには時間がかかると見てあきらめて買った。帰り路、其の店の前へ来て悔しいのでもう一度値切りにかかったが全然受け合ってくれない。孫に丁度よい、ちゃんちゃんこがあって値を聞くと二十元。随分安いと思ったが半額にしろと言ったら流暢な日本語で、「社長さん、二十元のものまけれと言った人初めて見たよ」と言いやがった私の負け。もっとも一寸あとに来た日本人観光客らしい人に「五〇元、五〇元、安いよ」と同じものを売りつけていたから、私にはちゃんと落し前をつけていたのだ。

烏来(ウーライ)と泰耶魯(タイヤル)の踊

国本鎮雄

稚気満々、台湾を訪れた三十四人のその中で、たった一人、タイヤル踊を踊ってきたので、その日の模様を報告します。

烏来は、台北市の南三十キロの、川あり滝ありのタイヤル族の山村で、最高の観光地。タイヤル族は、台湾北部で一番大きな原住山岳民族で、体格容貌ともに我々と大した変りはない。(昔、男子成人の儀として首狩りの風習のあった部族)

十一月二十二日、我々の台湾旅行もいよいよ大詰の三日目、上々の好天に恵まれて朝早く貸切りバスの客となる。運転手は陳さん、世話役は阿さん、ガイドは頼女史。気温すでに二十四度、冷房をきかせたバスは、台北市を離れて南へ向う。碧潭(ピータン)の街を抜けると、道は細まりだらだら坂の山道となる。道の両側は緑の木々が美しく、その中にハイビスカスの花の赤とポインセチアの頂葉の紅が映える。ガイドの台湾民謡に拍手を送りながら、景色の移り変りに見ほれている間に、烏来に到着した。土産物店街を通り、浅い清流を跨ぐ大橋を渡ると、有名なトロッコの乗り場である。このトロッコは昔は人力で押したらしいが、今では小型ヂーゼルエンジンで、四人乗り三、四輛編成、大きな音をたて烈しく揺れながら、二キロ半の山道を登って行く。右はなだらかな山、左は清流がトロッコの軌道と平行してうねっている。

トロッコを降りて民芸品店街をわづかに登ると、左手に雄大な高さ八十二メートルの白糸の滝が見えてくる。見事な滝で、その姿は層雲峡の白糸の滝とよく似ている。台北の小・中学生が修学旅行に来ていたが戦時態勢国家の子供らしく元気で凛々しい

道を右へ曲り、滝を背にして急な石段を登る。真昼の太陽がギラギラ、気温三十度高い石段が続き、へたばりそうになる。だが、老先生方が先にさっさと登って行くのに弱音を吐いてもいられない。三十段ほどの石段をやっと登り切ると、これぞ目指したタイヤル文化村歌舞場である。

舞台は三十坪ほど。扇形に階段状椅子席が約四百。高い後方の席につき、冷いジュースで咽をうるおしている間に開幕した。原色の民族衣裳の半被にパンツと襦当、羽根冠(ハネカンムリ)に数連の首飾を付けた小柄なタイヤル娘二十人ほどと、背の高いがっちりした若い男性十人ほどが、次ぎ次ぎと趣を変えた踊を見せてくれる。婚礼の踊、盆踊風、野辺送り、竹棒渡りなど。

右手には三人のバンド。木太鼓、これが面白い。太さ五十センチ位の丸太をくり抜いたもので、横倒しに床に置いて、上から長い棒で突いて鳴らす。エレキギターと歌い手。

終りが近づくと、タイヤル娘が舞台を下りて客席へ来て、一緒に踊ろうと相手を求める。立ち上がった私に、ヒスイと真珠の二連の首飾をかけて舞台へ案内し、羽根冠を形良くかぶせてくれる。

十数組の踊り手が、手をつなぎ輪を作る曲が入って、足を踏み鳴らしての勇ましい踊と、盆踊のようなものとを踊った。簡単な踊で、すぐにリズムに乗ることができて楽しく踊り廻った。

踊を終えて汗を拭き、握手を交わして歌舞場を出ると、向かいの白糸の滝のしぶきが一層すがすがしく、まことに楽しい行楽の半日であった。

‖短　歌‖

皆川英貞

健やかに　老を楽しむ　時間ありて
蓬莱島は　夢多き里

移りゆく　車窓の眺望　飽かずして
北から南　汽車に揺られつ

緑り濃き　蓬莱島の　此処彼処
風物彩どる　朱色うるはし

蓮の花　盛り開ける　清澄湖
四方の眺望に　酷暑忘れき

水鳥の　遊べる湖畔　過ぎゆけば
蒼きバナナは　たわゝにみのる

伝統の　祖先崇拝　目のあたり
三宝宮に　香華は絶えず

夫々の　感懐をこめて　台北の
夜の巷間に　ムードたのしむ

蛇蛙　鼠スッポン　生きた蝦
屋台に求む　台北の味覚

台北に　別離の祝宴　盛りあげし
海鮮料理は　ハイライトなり

スッポンの　生血胆汁　味うまく
赤と緑りに　血潮のさわぐ

求めゆく　四川広東　北京へと
美味真求　旅行は楽しき

一夜は　みどりの島に　夢をおい
蝦夷地の朝明　白雪まぶし

狩野正直

酒家
喧しく媚売る小姐寄り添える
酒家に在りて苦き酒飲む

忠烈祠
瞬きのいささかも無き衛兵の
瞳美し日射し強きも

烏来
晩秋なれどサルビアの花美しく
丈なし群れる烏来の里

竜山寺
線香を捧げ行き交ひ打伏して
菩薩に縋る若き人々

フーバーレストラン
ライト浴びまつわり舞える曲線の
妖しくも見ゆチャイナドレスよ

台湾食べ歩き

高橋昭三

熊の手のひらをはじめあらゆる美味珍味を二日二晩食べあかすと云われる華麗な宮中料理をはじめ、広東、四川、北京、湖南台湾(海鮮料理)を昔ながらの材料で忠実に再現し、安い値段で味わえるところは残念ながら現在の本家中国にはなく、世界広しと云えども台湾以外になかろう。それはその昔、蔣介石が中国一流の調理人を引きつれて台湾に渡り、台湾の人々が、外国の旅人が育てたのに違いあるまい。一流のホテルには一流の味があるのでやや高いが一人前三千円位、町の餐庁で二千円位、非常に高いと云われる海鮮料理でも五千円位、とにかく非常に安くてうまい。もっとも団体旅行ではいろいろ制約があり、一人千円位では満足と云うわけにはいかないが、いづれにしても日本では考えられない事である

しかし、私は台湾の味の真髄は夜店にあると思う。それを食べて死ぬ恐れのあるもの以外は皆食べてしまうし、その全てが夜店にある。動物は毛を除き血も皮も食べる肉粽は鶏の血と、餅米で作った粽である。種類がまた頗る多い。鼠・蛇・蜥蜴の肉は勿論、内臓まで食べる。その右翼は蟻食と鰐であった。その全てを食べてみたいと思うが、一生かかっても無理な事であろう。

今回は先づ蛙屋に立ち寄った。夜店には食用蛙など高級なものはあまりない。でも蛙の刺身はうまかったし、炒めものあり、揚げものスープ等約二十種あった。

途中で猿をみつけた。前々から是非猿の脳を食べてみたいと思っていたので店に入った。夜店の主人曰く、未だ小さいので大きくなるまで今飼っているとの事、来年の春頃来いと云われた。そのまま店を出るのは惜しいと思い見廻した所、鼠をみつけたこれはと聞くと料理するとの事、かなり大きいので病原菌を考え迷った。手まね足まねで判った事は、野鼠で大丈夫との事であった。その横に拇指頭大の毛のない蠢くものをみる。鼠の子であると云う。勇を鼓して注文してみる。物の本で読んだ所では、蜂蜜で育て、蜂蜜につけて出すと云うが、黒砂糖と薬草につけてあった。主人は噛まないで飲めと云う。一匹をのむ。口の中でチュー、喉の奥でチュー、二度鳴くと聞いたが何も云わず胃の中に収る。今度こそ味を確かめてと二匹目をのんだが、やはり同じであった。何の事はない搗き立ての餅を黒砂糖汁で飲みこんだ様なもの、薬草の味だけがほろ苦かった。

次に蛇屋へ寄る。骨スープ、生血、肝、蒲焼でフルコース、蛇は毒が強い程値も高い。猛毒百歩蛇は危険の故か、肉は食べさせない。生血と肝だけで四万円もする。一度食べたがあまり旨いものではなく、むしろ、漢法医学と信仰のせいではなかろうか今回は蝮で我慢する。錦蛇の刺身が旨いとさかんにすすめられたが、今回は最終目的スッポンの予定があり、次の機会にゆずる事にした。

スッポンは一流店でも出すが、やはり夜店、それも三流がよい、一流店の味は日本の中華料理店でも食べられる。生血は赤ワインで薄め、肝は緑のリキュール酒で薄めるなど高級なものではなく、血は火がつく地酒焼酎で割る。第一、一匹分を一人で飲むのだから濃くて旨い。肝は破らないで焼酎にポンと浮かして出す。ほろ苦く焼けつく様なアルコールが喉にしみる。肉も薬草の臭がプンプンする。子供の頃富山の薬袋をあけたあの臭だ。三千円、一流店で食べれば一万は軽くする。

紹興酒を隣のテーブルの青年達につぎ、日本の煙草をプレゼントしたりしている中に、アルコールも手伝ってすっかり仲好し

となった。青年達が一人一人彼等の酒を私についでくれ、立って乾杯をくり返す。途中で彼等の酒はあの焼酎だなと気がついたが、残すと叱られるのでやけくそになり乾杯を繰返す。

翌日皆さんと一緒に二日酔で取り残されずに無事日本に帰りつけたのは、蛙かな、蛇かな、それとも鼠の御利益かなと、飛行機の中で静かに考えた。

余談

大久保　洋平

台北で求めた雑誌「時報周刊」（第二四七期中華民国七十一年十一月廿一日～廿七日）に次のような広告が載っていたので紹介します。

請注意！国内首度破天荒的創挙—

北海道雪祭　時報周刊　読者特恵　観光団!!

（自即日起剪下印花寄至主辦単位即可享受九折読者特恵価、名額有限、請悠捷足先登、以免向隅）

●親親旅遊帯悠漫遊真正北国之冬冰雪祭典以及観賞層雲峡・萬年大雪山・神秘摩周湖・北極流冰等北海道聞名遐邇的勝景。

●北海道六大祭

・7日団　・9日団

雪祭　氷瀑祭　流水祭　氷祭　湖上祭　氷雪祭

●請向大成旅行社　索行程表

出発日期　1月28・29・30・31・2月2日

費用　NT$20、000+US$600=NT$44、000（読者特価39、600元）

主辦　大成旅行社　協辦　時報周刊

賛助　日本亜細亜航空

そして頁の下方に切取り申込用紙が刷られています「註NT$（ニュータイワンドル）一元は当時日本円七円に相当」

さて此の冬には何人の台湾からのお客さんが北海道を訪れて呉れたのでしょうか。

霧のち晴れの

洞爺一泊旅行

黒光康夫

春の行事委員会で昨年の三十周年記念旅行は遠出したので今年は近い所で一泊旅行にしたいと云う事で衆議一決し洞爺一泊旅行に決まる。今年はオホーツク高気圧が原因で春先から夏になっても低温の日が続き更に霧や雨の日が多く当日の天気予報もあまり芳しくない。七月十六日午後一時観光バスは予定通り市役所前を出発、次々と会員を乗せ鷲別に到着する。参加の会員も初めは三十五名の申込みが二十四名に減り幹事も人数の把握に大変だったらしい。昼頃止んでいた雨もその頃から降り出しオロフレ峠方面は雲と霧で全く見えないので、予定を変更し三十七号線で伊達―長和―壮瞥を経由し湖に出る。霧のため中島は全く見えない。

十八歳のバスガイド嬢から有珠山の伝説などを聞き乍らやがて昭和新山に着く。新山は盛んに白い噴煙をあげている。有珠山ロープウェイで大有珠に登る予定も山の中腹迄立ち込めた霧の為またしても中止し、洞爺観光ホテルに向う。旅館到着は予定より一時間も早く三時半だ。その頃から霧が音もなく取り払われ中島が優美な姿を現す到着早々に麻雀が始まる。覗いて見ると三卓になっていた。時間がたっぷりあるので一風呂浴び部屋で寛ぐ。部屋は最上階の七階にあり軒先に燕が巣を作って居り育雛の最中で巣の中で雛が親鳥の餌を待ち時々顔を覗かせる。やがて六時宴会場の大広間に皆んなが集まる。記念撮影があり原田会長の挨拶のあと東副会長の乾盃の音頭で懇親宴会が始まった。接待の女性の酌で話がはずむ、やがて太田先生のカラオケなしの演歌の独唱があり興が乗って来た所で部屋を暗くして御座敷ショーが始まる。二人のダンサーが交替で客席に下りて来ての熱演で拍手が湧く。

八時半、佐藤（善）前会長の閉宴の乾盃で一と先ず部屋に引揚げる。向ひの部屋で再び麻雀が始まる。長老の数人は部屋でテレビやビデオを楽しまれた様だ。その他の人は幹事室に集まって来て酒盛りとなる。九時になり湖上で花火大会が始まる。赤青黄と見事な花が夜空を彩る、水中花火の轟音が凄まじい、夏の夜の一大ページェントだが夜毎打揚げる花火代が一億円にもなると云う事だ。花火もやがて終って酒と共に話が弾む、女性と約束をした先生が居て断りの電話をする筈が皆を引連れて町に出る事に変ってしまう。K先輩に引張られて接待に来ていた女性達のサロンへ行く。店には先客が二、三人いたが、そのうちその人達は帰り貸切りとなる。料金は幹事の交渉でぼられる心配はない。女性も十人、我々も十人酔ふ程に太田、斉藤（修）、深瀬先生

等のカラオケやら、ダンスを楽しむやら一同歓を尽くして宿に帰る。朝のまどろみを燕の声で破られる。風もなく薄曇りの天気だ。所用で早朝に帰る人やゴルフ組は夫々出発し、残り十五名は十時の遊覧船で湖上に出る。青空が見え始め久し振りに暖かくなる。山巓にはまだ一部霧が見られ、ゴルフのスタートが遅れるのではないかと思われる。船は先ず辨天島を目指す、水清澄にしてあくまで青い。島に着く頃ウグイの大群が船に随伴する。浮見堂左手の大島の桟橋に着く。魚の餌を売っていて此処にもウグイが群棲している。島に上陸し森林博物館を見学したり、散歩道を歩き、島を後にする。湖上から見る大有珠は嘗ての男性的雄姿は変容して女性的姿態にさえ見える。湖畔につき火山博物館に入る。一九七七年八月の有珠山大噴火の出来事を集大成し陳列と噴火当時の再現を見せて呉れる。十二時湖畔を出発洞爺湖を眼下に見乍ら武四郎道を下り三樹園に着く。鄙びた温泉宿で老三樹で有名だ。くわ、桜、せんの三種の古木が絡まり合ひ樹令千数百年と云う事だ。やがて用意が整い昼食が始まる。現地産のアスパラ、チップの美事な塩焼き、フライルイベと美味に満足しビールや酒の量がふえる。合流する筈のゴルフ組の到着が大巾に遅れたため心を残し乍ら先に出発する。往路変更したオロフレ峠を経由する事になる。途中、三恵病院に立寄りコーヒーをご馳走になる。車中でバスガイド嬢出題の珍問奇問に賞品が懸かるが仲々答が出て来ない。やがて峠の大観望に着く。強い西風と濃い霧の為に視界は零だ。早々に峠を下る突然霧が切れクッタラ湖から太平洋のパノラマが眼下に展開する。登別は雲一つない快晴だ。カルルス温泉を通りバスはまだ日の高い中に一路家路を急いだ。

親交会ゴルフコンペに参加して

野村靖宏

親交会の旅行は、普段あまりお目にかかれない諸先生と歓談出来る有意義な機会であり、今回も参加させてもらいました。

今年は洞爺湖という為か、例年より参加される先生が少なかった様ですが、初めての洞爺湖カントリー・クラブでのゴルフコンペという企画も楽しみの一つでした。

前日は、宴会、麻雀と夜更ししたにもかかわらず、朝6時起床、入浴、朝食後、予定通り7時ホテルを出発。

このゴルフ場は、山頂にクラブハウスがあり、霧の多いコースと聞いていたのですが、案じていた通り、頂上に着く頃には、視界40～50m程度と思われる最悪のコンディションとなりました。聞くと週に一日程度しか、晴れる日がないとのこと。その割には、ゴルファーが結構沢山来ているのに驚きました。

30～40分遅れてスタートとなりましたが霧はますます濃く、30m程先までしか見えず強くスライスしたり、引っ掛けると、すぐロストボールになりそうです。

高校生とおぼしきキャディーが、大声で〝○番ホール、いいですか！〟と叫んで、OKの返事を聞いてから打つ為、時間のかかることかかること。あちこちから、叫び声が行き交いにぎやかで、長い待ち時間の為何回も大声で聞くので仕舞には多少、投げやりな返事も聞かれました。待つ割には珍しい条件下、雑談の話題にこと欠かず、退屈もせずに3ホール目のグリーンへ。この頃から急激に霧が晴れ、眼の前に噴火湾が一望できる状態となりました。

その後は、日も差し軽く汗ばむ絶好のゴルフ日和となり前半を終了。合流時間を気にしながらも、前半で中止できずゴルフを続行することとなりました。

インに入る頃には曇り空に風も吹いてやや肌寒い天気となりましたが、時間を気にしつつも、無事18ホールを終了しました。

ともあれ、霧あり、暑さあり、風あり、種々の条件下での楽しいゴルフコンペでした。

参加者は6名と少なく、年長組（深瀬、鴨井、児玉先生）、年少組（皆川、斉藤（修）先生、野村）という組み合わせになりました。

ハンデ頭の皆川先生は、一番ホールいきなりOBを打った為か、又前日のアルコールが抜けきらないのか集中力を欠き全くの不調、斉藤先生は、旅行の幹事でもあり、昼食時の合流時間を心配しながら久しぶりにクラブを振るという悪条件が加わり、これまた不調、野村は、実力通り、詰めの甘さを暴露してダブルボギーペースといった具合で、景色を眺がめ、きれいな空気を吸いながら歩くピクニックとなってしまいました。

年長組では、深瀬先生が濃霧の中のホールを連続パーであがる好調さで皆を驚かせました。天候が回復して視界が良くなってから、かえってスコアが伸びなかった？とはいえ、堅実なプレイで、ただ一人アンダーパーの優勝となりました。

鴨井、児玉先生も年少組にくらべるとまあまあのスコアで、全体的に年長組の圧勝となりました。

帰りの道すがら深瀬先生に伺ったところ霧で先が見えず、無心で打ったのが良く不調を脱出できそうとの話でした。全く何が幸いするかわからないものです。

競い合うコンペには、程遠い感じでしたが、非常に楽しい親睦ゴルフとなり、良い思い出となる一日でした。

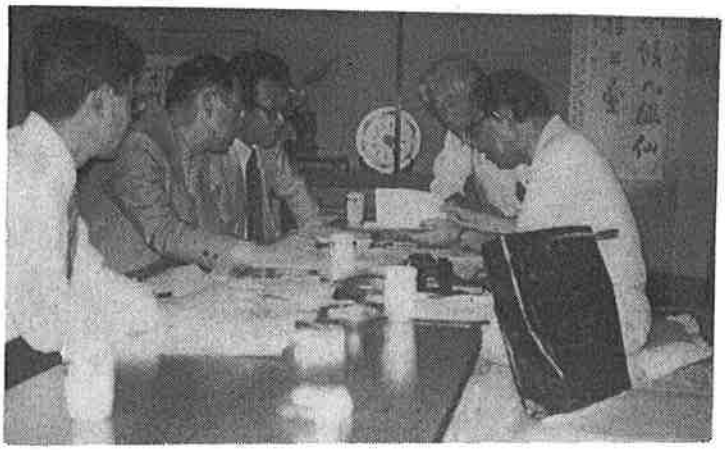
又、このゴルフ場からの眺望は素晴しく噴火湾はもとより、近くは虻田、伊達の町遠くは、渡島半島、駒ケ岳まで一望でき、反対側に目をやると、洞爺湖を一望できる雄大な美しい景色で、美幌峠から見る屈斜路湖を思い出しました。

はじめての人ならば、この両側の素晴しい景色に見惚れているうちに一ラウンド終ってしまうのではないでしょうか。

是非もう一度行ってみたいゴルフ場になりました。

会　員　異　動　　昭和57.8～58.8

月　日	事　由	氏　名	備　考
57.8	転　出	大坪一昌先生	札幌市豊平区真栄331　真栄病院
57.12	入　会	大久保淳子先生	室蘭市中島町3―40　大久保眼科医院
57.12.3	逝　去	塩沢直人先生	
58.2	退　会	太田郁朗先生	
58.5	入　会	小田代亨先生	室蘭市海岸町2―2　室蘭駅前クリニック
58.5.2	逝　去	桝谷儀一先生	



最終編集会議風景
S58・9・22（医師会館和室）

編集後記

秋も最中。波久島をお届けする時節となりました。今年の北海道の作柄は不良とのことですが、波久島四号の編集は皆様の御協力により順調に進めることが出来ました

原稿をお願いしたところ、多くの先生から大作、短篇、さまざまな分野に亙って秀作が寄せられました。本誌も号を重ねるごとに固さも取れ、常連は益々快調にペンを走らせ、初めて投稿される先生も次第に増えて内容も豊富になり、編集委員一同、感謝に堪えません。

これからも親交会のサロンとして気軽に利用して下さい。

前号発行から僅か一年の間に塩沢直人先生と桝谷儀一先生がお亡くなりになりました。両先生共、会員年数も長く色々な趣味をお持ちでしたのに遂に本誌に登場して頂けず悔まれます。

両先生のご冥福をお祈りいたします。

本号から編集委員に異動がありました。創刊の準備から三号まで中軸を務められた上田智夫先生、大岩昌生先生、小國親久先生が勇退されて新しく神島章、児玉直彦、沢山豊、三先生に加わっていただくことになりました。

加藤治良、高島信治、村井玄乙、沢山豊児玉直彦、神島章、三村博通、青木茂事務長、大久保洋平の九名が四号からのスタッフです。

これからも皆様の御協力、御鞭撻をおねがいいたします。

室蘭を離れられた諸先生、どうぞ近況をお知らせ下さい。御健康を念じております

玉稿をいただいた諸先生、いつもお世話になる室蘭印刷の皆様、お陰様で波久島四号が誕生しました。ありがとうございました。

（大久保洋平記）

親交会会誌　波久島
発行日　昭和五十八年十月二十五日
発行所　室蘭市医師親交会
印刷所　室蘭印刷株式会社